

山
磨
編

山鹿編目次	◎	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
寒内宮	寒内宮	花火大会	秋月藩・東運寺藩 貫米蔵の跡	旧芦屋橋跡	城公園	白山神社	瑜珈神社	秋葉山光清の歌碑	秋葉神社	白神山神社の石祠	稲荷神社	山鹿兵藤次秀遠之城址の碑	史蹟山鹿城址の碑	城山世蔭群の址の碑	花岡山院	島郷四国	蛭子神社	授神社	江川炭坑の跡	大君炭坑の跡	薬師堂	咳の地蔵
八七	八九	九一	九二	九二	九二	九二	九三	九三	九三	九四	九四	九四	九四	九五	九五	九五	九六	九六	九六	九七	九七	九七

35				34	33			32	31	30	29	28	27	26		25	24	23	◎	22	21
は	中	麻	小	新	秋	卓	稻	観	萬	石	大	山	現	地	輪	安	城	城	案	大	安
た	西	生	川	廟	葉	錫	永	音	千	井	鹿	現	門	藏	藏	楽	山	山	内	君	徳
民	米	友	又	所	神	泉	久	堂	代	翠	村	在	饗	堂	附	寺	庵	神	図	神	天
俗	吉	七	之	墓	杜	の	四	・	神	女	役	残	舎	(屋敷道)	経	(真宗)	・	・	・	社	皇
資	之	碑	助	地	・	碑	郎	・	社	の	場	っ	跡	・	藏	・	・	・	・	・	行
料	碑	・	之	・	・	・	基	・	・	句	の	て	の	・	・	・	・	・	・	・	在
室	・	・	碑	・	・	・	正	・	・	碑	の	い	碑	・	・	・	・	・	・	・	所
・	・	・	・	・	・	・	之	・	・	・	跡	る	・	・	・	・	・	・	・	・	趾
・	・	・	・	・	・	・	碑	・	・	・	の	一	・	・	・	・	・	・	・	・	の
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	碑	の	・	・	・	・	・	・	・	・	碑
一〇七	一〇六	一〇六	一〇六	一〇六	一〇六	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五	一〇四	一〇四	一〇四	一〇三	一〇三	一〇二	一〇二	一〇二	一〇一	九九	九八	九七

48		47	46	45	44	43		42	41	40		39	38					37	36		
貴船神社	校歌の碑裏藏本春秋子の句	鹿門樓舎の碑(創立百周年記念)	山鹿小學校跡	法華宗庵跡	鐵島神社の岸	浪懸の九郎の歌碑	高山彦九郎の歌碑	漁夫遊難者供養塔	梁師堂改修工事	還賀川小学校趾の碑	山鹿行者の碑	岡縣主祖廟鱗宅址の碑	須賀神社	金毘羅神社	五輪塔と石仏	宝篋印塔(千寿御前の墓)	銅製經筒	宝篋印塔	五輪塔	法輪寺(禪宗)	タ方ヤ美術館
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
一一一	一一一	一一〇	一一〇	一一〇	一一八	一一八	一一六	一一六	一一五	一一五	一一四	一一三	一一一	一一一	一一〇	一〇九	一〇九	一〇八	一〇八	一〇八	一〇七

65	64	63	62	61	㊦	60	59	58		57	56	55	54	53	52		51	50	49		
夏井ヶ浜の積石塚古墳	浜木綿の群落の地	石棺遺跡群	夏井ヶ浜遺跡群	千疊敷	案内図	狩尾神社	英鹿神社	山鹿貝塚	下関要塞第一区地帯標	堂山の千体藏と石塔群	洞山御台場跡	柏原(伝説)阿彌陀ヶ池趾の碑	県道開通記念碑	狩尾神社第一鳥居	六部塚	野見山朱鳥の句碑	藤本春歌の碑	万葉の歌碑	魚見公園	逆股の地蔵堂	麻生神社
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
一三四	一三三	一三三	一三三	一三三	一二九	一二八	一二八	一二七	一二七	一二六	一二五	一二四	一二四	一二三	一二三	一二三	一二二	一二二	一一一	一一一	一一一

66	土器面祭祀跡	一三四
67	土器面窯跡	一三四
68	不動堂	一三四
69	徳満神社	一三四
70	鉢澤出土地	一三五
71	池松神社	一三五
72	猿庚中	一三六
73	田屋窯跡	一三六
74	疫神社	一三六
75	善福寺(浄土宗)	一三六
	河童縁起書(伝説)	一三六
76	生目八幡宮	一三七
77	山鹿鉾雪復旧之碑	一三八
77	大師堂	一三八
	福岡県指定文化財一覧表	一三九
	芦屋町指定文化財一覧表	一三九
	芦屋の石造物一覧表	一四〇
	石造物の図解	一五八
	明治～大正初期の芦屋風景	一五九
	大正六～七年頃の芦屋風景	一六二
	大正末期～昭和初期の芦屋風景	一六四
	思い出の芦屋風景(木版画)	一六九

八朔賀の刷り画
(本文39頁参照)



芦屋昔話	一七三
芦屋の方言	一七七
はねその頃	一八一
参考資料	一八八
あとがき	一八九

「はねそ」の踊り（本文一八頁参照）



雁木区築山にあり祭神菅原道真公、本社創立の由緒を原めるに、直方の藩主黒田家此所に船を繋ぎ船頭船子を置き、江戸往來の用に供せられるが、当時の船長岩崎清兵衛外二名相謀りて、享保十一年(一七二六)正月勧請せりと云う。明治五年(一八七二)林次敏氏福岡県庁より召され、第十区(馬郷一円及戸畑・枝光・中原)戸長手伝兼山鹿魚町戸長を命ぜられければ、赴任して組頭・伍長など集めて何くれと町の事ども尋ね聞ける中に、或人曰当地築山大満宮古へは六月二十五日船にて遷幸ありて頗る盛なる祭なりしに、三十年以前より廃絶せるは遺憾の事ともなりと語りけるより、其有様など委しく問試みし後を再興しては如何といひけるに、一同大に賛成しければ、然らばとて諸事旧規など取調べ其筋の許可を得て之を実行する事となりたり。信其祭典及び神幸の次第は、六月二十四日暮頃より神職・町役人一同社前に参向し祭典を行ひ、神職御神体を神輿に移し奉りて、魚町村浦と順次神幸ありて浦の浜辺に設けたる額宮に着せ玉ひ、此にて又祭典ありてやがて神輿を御船に乗せ奉り、神職・町役人御供して港口に向ひ漕出ぬ、りゅうりようたる音楽は涼風に和して爽快いふばかりなく、二隻の引船は櫓声勇ましく、御供船は幾隻もなく祓船に提灯を懸ねて酒肴をさえ載せたりと見え、追々笑語の声湧くが如く、回視すれば満口御供船を以て充され壯観いふ計りなく、港口の波止近くまで漕出してやがて引返し

芦屋の東町の辺まで漕上るころ、神社の岸頭に篝火を焼くを合区に漕返り、篝火のほとりより神輿を上げ奉り宮殿に還輿なし奉る頃は東方既に白めり。斯くて其翌年よりは芦屋町は云も更なり、近村よりも御供船を出す者多く、或は遊船を兼ね妓を載せたるもあり其盛況言語に絶す。実に一地方に稀なる祭典とは成れるなり。其後継続して今猶之を行へり。

(遠賀郡誌)

※菅原道真が太宰府へ左遷されるとき、道真一行が九州に入つてからの行路には、海路・陸路の両説がある。陸路説は周防の国府に立ち寄り、それから豊前の海岸に沿き、海岸づたいに関門海峡を通り、門司に上陸して陸路太宰府迄を通つたとなつてゐる。海路説では関門海峡から船で博多へ向つたのだという。海路説だと芦屋に寄つたことも考えられる。

※道真を祭る天満宮は全国各地にあるが、芦屋町山鹿魚町雁木の築山天満宮は、享保十一年(一七二六)黒田継高の家臣山崎義房が創建したものである。靈示によつて船御幸の神事が始められたのは、寛政三年(一七九二)からであるという。

毎年旧の六月二十五日神輿は氏子たちにかつがれ、長歳やチヨウサイヤ一の呼び声とともに区内をまわる。斯くて神輿は浦の浜辺に設けられた頼所に着かれ、此処で再び祭典の式が行われる。やがて夕なぎの遠賀川に浮かべた御船に神輿がうつされ、紅提灯に飾られた数十の供船と共に川を下り、浜崎浦の石波止の上にある連瀬神社のあたりまで行き、また上流

に向つて東町の辺まで川を上り、その間はりゅうりようたる
雷の音が涼しく水面を流れ、櫓音もゆるやかに宮人の優雅を
思わせる古色独特な船御幸の神事で、地方に類な水上の祭典
である。船御幸は道真をなぐさめるため、土地の老が船を浮
かべ漁をして見せたのが起りであると伝えられている。

(芦屋町誌・芦屋の葉)

◎織立石柱 — 明治三十年(一八九七)四月

総代	久枝 吉次	藤崎 清吉	林 孫十
見ヶメ	藤江 彦助	藤崎 清三	兵道 忠三
藤江 彦助	兵道 定五郎	伊藤 幸太郎	
塩田 菊松	吉永 弥作	吉永 清太郎	
林 重太郎	真貝 林兵衛	井上 伴太郎	
林 榮次郎	中西 喜五郎		
筑田 富吉	井上 安太郎	坂尾 久次郎	
武田 古造	江崎 久吉	藤江 幸七	
野口 幸七	塩谷 友次郎	重岡 長五郎	
藤崎 清太郎	藤崎 力吉	野口嘉石工門	
重岡 甚助	猿田 市太郎	阪尾 宗平	
伊藤 八十吉	野口 嘉平	久枝 六次郎	
熊野 貞十	藤崎 勘市		
雁沼誠助社 社長幹事			
江浦 勝兵衛	武田 隣五郎	阪尾 甚次郎	

◎玉垣 — 明治三十五年(一九〇二)六月

◎鳥居(天満宮) — 文化十年(一八一三) 魚町中

◎猿田彦命 — 寛政十一年(一七九九)五月

◎石祠 — 大正八年(一九一九)十月 小田 伊平

◎玉垣 — 明治四十年(一九〇七)六月

塩田 萬太郎	野間 兵七		
野口 善作	藤崎 幾平	野間 一郎	
坂尾 彦市	藤田 松太郎	金子 長三郎	
出中 職平	坂尾 兵太郎	兵道 安吉	
兵道 久吉	中西 政次	藤原 平次	
藤江 友次郎	三浦 安吉	和田 清五郎	
大貝 國太郎	藤崎 實太郎	井上 高市	
林 文助	藤本 國藏	川村 豊吉	
金子 宗七	野間勝右工門		

◎木鳥居(天満宮)

◎一千五十年祭記念植樹の碑 —

昭和二十六年(一九五二)二月

雁木区

◎朝井 石 一 明治十年（一八七七）八月 坂尾榮次郎明茂

◎敵 盟 一 明治三十一（一九一八）六月

坂尾 甚次郎 野口 加市 久枝吉右衛門 外

◎牛 石 像 一 大正三年（一九一四）七月

世話人 大貝 半三郎 兵道 武七

石 工 松尾 近太郎

改修工事移転

開業五十年 記念 飯塚屋商店 小田 伊平 同 富太郎

旧店員 小田 源次郎 柳田 才藏

当時店員 石井 彦太郎 吉永 小七

井上 万助 竹井 俊造 早川 金造

花田 保造 立花 親造

◎燈 籠 一 弘化二年（一八四五）八月

小田彦五郎常陸 小田定右衛門「種

※築山天満宮のあるところは地形が築山に似ているが、天満

宮裏側をけずりとった際多量の庭石が出た。同石材は水巻

町古賀地区の産であるから、昔たしかに人工の築山があっ

たと思われる。（芦屋町誌・鶴原吉平氏談）

※花 火 大 会 一

築山天満宮の祭典日には船御幸の神事と共に、芦屋橋畔で
打上げられる花火は、県下にも比類のない豪華なものであ
る。青く澄みきつた水面に映える大空の花、打上げ花火や

仕掛け花火、パット開いたしだれ柳が、満船紅提灯に飾られ
た船上に消ゆれば、橋上はおるか遠賀川口の両岸を埋めつく
す数万の観客は、壮観なとえようもない大空の祭典に、夜の
ふけるのも忘れるのである。（芦屋の葉）

※戦前は漁船のある家々から又町内とか親戚招待とかで、紅
提灯を船一杯に飾って水上よりの花火見物を年に一回の楽し
みにしていたものだった。芝居見物と同じように御馳走をい
ろいろと沢山つくり、船上にて酒宴をひらきながらの花火見
物は楽しいものだった。船頭さんも酒がまわり時には船と船
が突きあたりたり、すれすれになったり又船と船をくつつけ
て、お互に酒を汲みかわしながら料理を交換したり賑やかな
ものだった。筆者が小学生のころ金魚花火といつて、水上で
くるくる廻りながらパンパンと音をだしながら水上をはね廻
る花火があったが、一度などは船の中に飛び込んできたので
驚いて皆が立あがったので船が左右にゆれビックリした事も
あった。戦前の花火大会は遊船に乗って花火を見るだけでな
く賑やかで楽しいものだった。以前は旧芦屋橋下流の山崎側
砂浜で打上げていたが、不発のものや横にそれた花火で怪我
人が出た事もあり、危険防止のため最近では川の中ほどに浮べ
た浮ドックから打上げている。花火の本舞台は以前芦屋橋の
下流であり遊船も数多く出ていたが、最近では芦屋橋の上流が
本舞台となり遊船も数少なくなった。遊船は橋から上流には
進入禁止。芦屋花火大会は七月最後の土曜日に催される。芦

屋花火大会は現在芦屋町主催で行われているが筆者が子供のころには新聞社が主催であったような気がする。

2

秋月藩・東運寺藩貢米蔵の跡の碑

(碑文)

(雁木区)山鹿二―

福岡藩の秋月・東運寺(直方)両支藩は山鹿に貢米蔵と繫船場を設置し元和九年(一六二三)船奉行・御船手らを置き両藩の貢米その他の産物を遠賀川の水運川端(かわりた)を利用して、ここに集積、大阪蔵屋敷へ廻船搬送の任にあたった。秋月藩貢米蔵は元禄二年(一六八九)黒崎に移した。直方藩は享保五年(一七二〇)鹿藩になった。

※当時の船手の土を岩崎・坂尾など云い、船手の子孫今猶存せり。

3

旧芦屋橋の欄干元柱石

大正六年(一九一七)四月

(雁木区)山鹿一―

旧芦屋橋の事は芦屋編32旧芦屋橋に記す。

4

城山公園 ― (雁木区)山鹿二―

遠賀川河口の城山公園(高さ四十五メートル余)全域に、桜樹數百本・つつじ數万本を植え、開花の時期には全山花と人で埋まるほどの賑わいで、よき行楽の地である。頂上より眺める景色は誠にすばらしい。

英彦山に諒を発し筑豊三郡を流れきたる遠賀川を眼下に見お

ろし、遠くには戸田山・城山・孔大寺山・湯川山の連山が見える。響灘に臨む波津より芦屋に至る弧状の海岸線は三里松原と言われて松の木が連なり繁茂している。遠くに連なる山々と白砂青松の風光明媚な海岸は、霧の絵のようである。この城山公園内にある史跡を次に掲げる。

5

白山神社 ― (雁木区)城山公園内

◎鳥居 (白山大神) ― 文化十年(一八一三)九月再造

◎水盤 ― 明治十四年(一八八二)正月

藤崎 清市 中橋 藤七 武田 源助
坂尾甚四郎 有藤 弥十 林 文七
岡田善五郎 田中幸右衛門

◎礎石 ― 明治十四年(一八八二)三月

◎鳥居 (白山社) ― 天保十三年(一八四二)正月再造
河部武右衛門 小田 儀助 岡田 定平
当町保正 小田定右衛門繁種 魚町中

- | | |
|-----------------|---------|
| 5 白山神社 | 6 駒珈神社 |
| 7 秋山光清の歌碑 | 8 秋葉神社 |
| 9 白山神社の石祠 | 10 稻荷神社 |
| 11 山鹿兵藤次秀康之城跡の碑 | |
| 12 史蹟山鹿城址の碑 | |
| 13 城山中世聚群の跡の碑 | |
| 14 花山院 | |

◎石祠 1 白山神社の石祠の項に記す

6 瑜珈神社 (雁木区) 城山公園内(権現堂山)

祭神は宇迦之御魂神で農業は勿論のこと、漁業・船乗りの開運の御神として篤く人々から信仰されている。此の山鹿の地に御霊を奉安したのは、山鹿荘の地頭職麻生家敗で、建久元年(一九〇)に麻生一族の繁栄と荘民の幸福を祈願して、城山の高地に御社を建立したのである。(瑜珈神社由来記)

◎木鳥居 (瑜珈神社) 1

◎潮井石 1 明治十四年(一八八二)正月

井上 作市 塩田 宗八 兵道 忠助

林 徳兵衛 藤江 権右エ門 金子 喜右エ門

小田 権右エ門 藤江 辰助 小田 彌助

小田 原勘兵衛

7 秋山光清の歌碑 1 城山公園内(権現堂山)

昭和三十七年(一九六二)三月

雪の上に 今そかがやく 西の海の

山鹿の城乃 弓張の月 光清

(碑文)

秋山光清先生は徳島の産、幼少の頃より和歌に親しみ、長じて上京し歌聖で国学者の黒田清綱先生に師事して斯道に精進された。明治二十年(一八八七)旅して芦屋に来るや、風光明

8 秋葉神社 (雁木区) 城山公園内(権現堂山)

嬪にして史実に富む此の地を愛し居を定め郷土史の研究に没頭し、祖先の偉業を讃え先賢の顕彰後進の教導に力を注がれた。その人格識見は高邁にして今猶先生の人格を慕ふ者多し。昭和三十一年(一九五六)三月二日八十四才を以てこの地に生涯を終へられた。茲に有志相計つて歌碑を建て先生の清徳を思ふよすがとする。

※氏は芦屋の郷土史研究に熱心な人であった。和歌をよくし芦屋水壑短歌会の創始者であり主宰者でもあった。

氏は平戸市長山鹿光世氏の実父である。

祭神 加遇契智神

◎鳥居 1 明治二十年(一八八七)六月 浜野中

◎玉垣 1 明治四十三年(一九一〇)移転 浜之町中

◎潮井石 1 明治九年(一八七六)

林 次敏 野中 惣七 石橋 八郎

塩田 清七 田中 茂助 林 清三郎

倉野 儀平 多賀谷猪之助 中西 藤兵衛

小田 伊平 吉永 茂三郎 益田 勘藏

占部 半次郎 小田 磨太 吉永 六次郎

堀江 興右エ門

◎燈籠 (常夜燈) 1 明治十一年(一八七六)三月 濱町中

◎卒 獻の碑 1 大正二年(一九一三)七月

⑨石 祠 林 清三郎 多賀谷伊ノ吉 小田 伊平
中西 四郎平 縄出 恒次郎 小田 栄吉
吉永 小一郎 富田 林ノ助 宮野 俊太郎

9

白山神社の石祠 (雁木区)城山公園内

権現堂山

祭神 大山祇神、麻生氏の鎮護社といわれる。山鹿兵藤次秀遠の霊も合せ祭り山鹿神社とも称されている。例年四月十日戸屋町先賢顕彰会により慰霊祭が行われている。

山鹿秀遠の子孫である平戸市長山鹿光世氏は毎年かがさずこの慰霊祭に出席されている。

⑩石 祠 文久三年(一八六二)二月

魚町庄屋船庄屋兼常大庄屋格 小田定右エ門

大庄屋格 小田彦五郎 大庄屋格 林 清三郎

大庄屋格 中西只石エ門

組頭 野間定兵衛 組頭 中西友右エ門

小田彦一郎 中西半九郎 小田彦蔵

倉野義兵衛 野間謙次郎 平橋利作

10

稲荷神社 (雁木区)城山公園内権現堂山

祭神 倉稻魂神

⑪石 祠 当魚町中

世話人 作次郎 久五郎

11

山鹿兵藤次秀遠之城址の礎

城山公園左側頂上より一段低い所
当屋町立小学校職員児童建之 大正十一年(一九二二)九月

12

史蹟 山鹿城址の碑

昭和四十一年(一九六六)三月

(碑文)

山鹿城は朱雀天皇の天慶年間鎮西奉行藤原の儀藤太秀郷の弟藤次によつて築城され、以後代々山鹿氏の居城となり、年を経ること二百四十年山鹿兵藤次秀遠が城主となった。寿永二年(一一八三)七月源氏に迫られた平宗盛は、幼帝安徳天皇を奉じて西国に落ち、さらに同年九月に太宰府に逃れる。此時山鹿城主秀遠は一身の盛衰を顧みず尊王の大義を休して安徳天皇を迎え、この城にこもり一徹専心天皇の為に忠勤を励んだ。元暦元年(一一八四)秀遠は源氏と共に屋島に出陣し忠烈むなしく戦に破れ、壇之浦において山鹿氏は滅亡するに至ったのである。山鹿氏滅亡の後には代々麻生氏の居城となった。※山鹿城址は戸屋町山鹿区の東南遠賀川に臨める小山にあり。断崖四十五メートルの丘陵上には本丸の址、段余の平地あり。二の丸の址も亦二段余あり、此の城山鹿氏代々の居城なりしが源平の乱に山鹿氏亡びて麻生氏之に代りて之に居れり。平家物語八巻に寿永二年(一一八三)九月平家は緒方三郎維義に追はれて太宰府も落ちられしが、山鹿兵藤次秀遠数千人にて平家の御迎に参る、斯くて秀遠に具せられて山鹿の城に籠

れり、山鹿にも敬慕すると聞えしかば取る物も取りあえず、平家は小船に取乗りて夜もすがら豊前国柳浦へぞ渡られける。
 ○(遠賀郡誌)

※山鹿氏の在城は約二五〇年、その後は宇都宮麻生氏が約四〇〇年余を所領し遠賀を中心にしてこの地方を支配した。

13

城山中世墓群の址の碑

(碑文)

(雁木区)城山公園内左側

この山鹿城跡は壇の浦の合戦に平家と連命を共にした山鹿兵藤次秀遠の居城であった。源平合戦後麻生氏は山鹿城を支配の拠点とした。昭和五十二年(一九七七)敷設歩道工事中、宝篋印塔や五輪塔などを発見し、発掘調査の結果南北朝時代の火葬墓群であることがわかった。出土した墓石や石像は町立歴史民俗資料館裏に移し保存されている。
 ※解説は芦屋編42頁山鹿城跡中世火葬墓石塔の欄に記す。

14

花山院 (雁木区)城山公園左側入口

◎堂宇 1

島郷四国第二十番札所

本尊 地藏菩薩

※島郷四国八十八ヶ所霊場は約二百余年前、小竹の庄屋香山弥次郎重治が安永九年(一七七六)三月開いた霊場と伝えられている。

◎水盤 1 昭和十一年(一九三六)九月
 ◎当敷地 八十四坪 寄進者名の碑 1

昭和十一年(一九三六)初春

15

蛭子神社 (雁木区)山鹿二一六

◎烏居(蛭子神社) 1 大正二年(一九一三)一月

改修工事移転記念 飯塚屋商店

区長 藤崎 平七 岡田和右門 畑野善右門
 組長 小田源三郎 中西九三郎 野口喜之松

創立者	武田 源助	小田 喜助	中西 福松
発起者	塩田 乙松	小田 喜助	中西 福松
岡田 和右門	兵道 忠三	中西 福松	
青田 力松	田中 鹿太郎	占部 半一	
野口 友次郎	空閑 森吉	田中 藤一	
石井 彦太郎	松崎 與九郎	野口 喜之松	
中西 スエ	小田 ヒコ	三原 テイ	
小野 キク	縄出 恒次郎	小田 富太郎	
世話 人	坂尾 兵次郎	藤崎 百太郎	
区長	野中 倉一	藤江 勝太郎	
組長	中西 古郎		
中西 倉松			
小田 富太郎			

石工 貝部 浪古

◎水 盤

◎潮 井石

井上作右門 武田 庄古 安道 忠平

天野 倉吉 久枝 孫平

岡田喜右衛門 小田権右衛門 井上 惣兵衛

吉永 喜三郎 藤江 彦助

◎玉 垣

河部 武口 小田 伊平 吉永 茂三郎

縄田 勘市 藤江 庄次郎

◎石 祠

祭神 事代主神

16

瘦神社 (雁木区) 山鹿二一七

◎鳥 居 (瘦神社)

小田 伊平 大正八年(一九一九)九月

◎石 祠 昭和十六年(一九四二)十二月

世話人 野口 喜之松 花田 梅吉

坂尾 春吉 中西 喜五郎 坂尾 兵次郎

坂尾 初治 坂尾 孝樹 坂尾 一美

17

江川

江川は芦屋町山鹿より若松区二島に達し、遠賀川と洞海湾と

18

大君炭坑の跡 山鹿大君

を連絡する。改修工事によって現在のような幅になったが昔は川幅も広く洞海湾の一部であった。筑豊興業で石炭の盛んに出る頃は洞海湾に石炭を運送する川船の数も多くよき運航路であった。

(瘦神社より徒歩三十分)

大君炭坑の開坑は明治二十七年(一八九四)頃である。日清戦争がはじまって炭界は好況をみせ、住友・三菱・三井などの大手資本がさかんに筑豊へ進出してきていた時代である。

大君炭坑の初代鉱主は春田惟たつたが、のちに城野琢磨が代って経営にあたった。大君炭坑は芦屋町山鹿(当時山鹿村)の大君にあつて、江川村との境界に位置していた。採炭作業は筑豊の小炭坑がそうであつたように、先山・後山による小切羽採炭法式がとられ、手掘りで掘った石炭はカゴで背おつて坑内からひき出されていた。石炭は江川岸で川船に積まれ若松港へ搬送された。坑夫たちは納屋に住み納屋頭の支配を受けていた。納屋頭は坑夫の雇入れから日常生活の管理、監督また作業の繰込みや割当て、勤務の督促、坑夫賃銀の代理受取りにいたるまで取り仕切つた。女の坑夫もいてはげしい坑内労働に従事していた。

城野琢磨のあと、三好鉱業の三好徳松が大君炭坑の経営にあつた。明治四十一年(一九〇八)頃であるという。本社は折尾にあつた。「芦屋の紙」(刀根為次郎)には大正五年(一九一

六)二月大石鋳業株式会社によって大君炭坑が創始されたと記されているが、三好鋳業に勤めていた永沼徳次郎氏は大正八年(一九一九)ころ大君鋳業株式会社と三好鋳業株式会社とが合併して、三好大君鋳業所が設立されたという。三好徳松は附近の群小炭坑を合併して、大正八年資本金二〇〇万円で新たに三好鋳業を設立し、昭和初頭には高松本坑・高松二坑・高尾坑の三坑を主力として業にあたっていた。現在の中間市蓮花寺附近までが高松本坑の区域であった。三好鋳業は佐賀県伊万里線の不要軌条を買ひもとめ、この軌条で高松本坑から大君まで鉄道を敷き、また折尾の引込み線もつくって送炭の利便をはかった。三好大君炭坑は第一坑から第六坑まであった。採炭の盛んな時は大君に一四〇世帯ぐらゐの採炭夫が居ったという。ボーリング使用による採炭方法もとられた。納屋は鶴ヶ浜や城ヶ浦あたりに建てられていた。

昭和九年(一九三四)ころ大君炭坑その他三好鋳業経営の炭坑が売山になり、日産コンツェルンの一翼である日本鋳業株式会社が経営にあたるようになった。

炭業界にも消長があつたが、終戦後の昭和二十六年(一九五二)日本炭鋳株式会社が火君炭坑を引き受け、日炭第五坑として昭和二十八年(一九五三)から採炭を開始した。工員は約二五〇名、大君に住宅が建てられて五〇世帯が住み、あとは梅ノ木・頃末・高松などの社宅から鋳業所用の汽車で通勤していた。採炭量は月最高一二〇〇トンくらいで、出炭は六〇〇〇

カロリー以上の洗中塊ばかりだった。石炭産業の斜陽化によって、採炭が打ち切られたのは昭和三十七年(一九六二)月である。廃坑にもなつて三員住宅は解体され鉄道も取りはずされた。昭和四十六年(一九七二)ころに県営住宅が建てられた。(吾妻町誌)

19

薬師堂 山鹿大君

島郷四区第七十七番札所

本尊 藥師如来

20

孩の地藏 山鹿大君

お詣りをするときと暖かくなると、願をかけなかつたときはお礼参りの時に豆腐をお供えするという。

21

安徳天皇行在所跡の碑 山鹿大君

(碑文)

寿永二年(一一八三)七月平家一門は安徳天皇を擁して、九州太宰府へ都落ちしたが、豊後の緒方三郎惟義の平に追われ悲惨な逃避行を続け、箱崎・吾推・宗像を過ぎ早水峠を越え山鹿兵藤次秀遠のお迎えを受け山鹿城に籠られた。のち秀遠は此の地大君の茶臼山(此の上変電所の位置)に幼帝のため行在所を造営した。

大君神社 山鹿大君（築館堂より徒歩十三分）

◎磯立石柱 昭和九年（一九三四年）十月

◎鳥居（大君神社）昭和九年（一九三四年）十月 大宮区中

◎水盤 昭和二年（一九二七年）四月

◎石祠 明治三十五年（一九〇二年）九月

◎大君神社 杜出緒の猿

祭神 安徳天皇 大山祇大神 創立年不詳

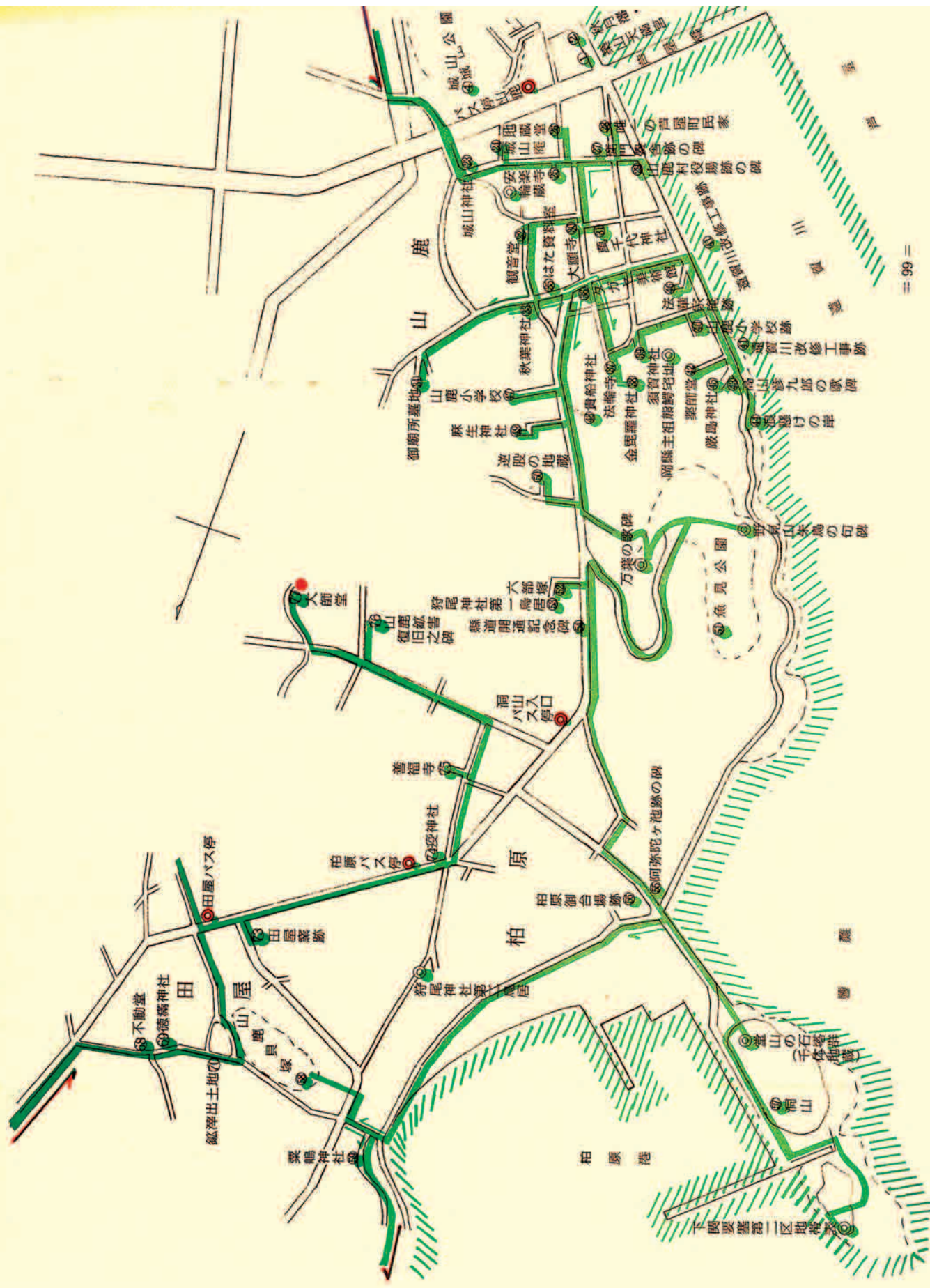
寿永二年（一一八三）山鹿城主山鹿兵藤次秀遠茶臼山に行在所を設け、安徳天皇を迎え奉った駐蹕の跡にして、何時の世からか此の地を杜地として安徳天皇・大山祇大神を奉祀す。後大君炭坑が開坑されるや明治三十九年（一九〇六）現在の此の地に社殿を移し、炭坑の主護神として祭祀を厚くす。此の里を大君と呼ぶは他所にかゝる地名なく、安徳天皇の在りし地を杜地による地名にして、此の里に限り水田に煙を生ぜず毒蛇又人に害せずとか、或は杜地の下の谷を「稚子（わかし）が谷」と呼びて幼帝の駐蹕し給える故に呼ぶとの伝説あり。

※山鹿城へ安徳天皇を迎える

寿永二年（一一八三）七月都落ちした平家一門は、安徳天皇をいただいて九州へ入ったが、こゝも安住の地ではなかった。太宰府から宇佐神宮へ移って大宮司の宿所を皇居と定めたものの、源氏に加担する豊後国の住人緒方三郎惟義に追われて、また太宰府へひき返した。緒方の軍勢が攻めに

のほって来たので、筑後国高野木庄でむかえ撃ったが、さんざんに打ちやぶられて退いた。平家軍は太宰府をひきはらい安徳天皇、一門の公卿、女房たちと共に、筑前箱崎の方へ逃げた。「平家物語」「源平盛衰記」などに逃避行のありさまが描かれている。「おりふしくたる雨車輪のことし。吹く風砂をあぐとかや。おつる涙、ふる雨、わきていづれも見えざりけり」。「御足よりいづる血は沙をそめ、紅の袴は色をまし、白き袴はすそ紅にぞなりける」といった雨のなかの悲惨な逃避行であつた。住吉・箱崎・香椎・宗像を過ぎ垂水山・鶏嶺をこえ、山鹿兵藤次秀遠の案内で山鹿城に入った。このとき安徳天皇は六歳であつた。高倉天皇の弟、皇子で、名は言仁、母は清盛の娘徳子（建礼門院）である。秀遠は山鹿城東方の茶臼山に安徳天皇の行在所を造営した。「大君」という地名はそれに由来している。大君神社が祭られ、菊の紋章をうった石祠があるのは、安徳天皇を奉祀したものである。「お花畑」という地名も残っているが、これは安徳天皇をなぐさめるためお花畑をつくったので、その名がおこつたのだという。平家の公達が鶴と遊びたわむれたという谷間には「稚児ヶ谷」という名がつけられたという。平家一門の山鹿滞留期間は半月以上、一ヶ月たらずであつたといわれている。

※都落ちしたときには、安徳天皇・二位尼（清盛の妻）、建礼門院はじめ女官たち、宗盛・時忠・敦盛など公卿一〇人、信基・清経・忠房など殿上人一六人、一門につながる二位僧都全真・中納言律師仲快ら、また家人七〇〇余人がいたが、



途中または九州入りしてから抜ける者も多かった。

城山神社 (三軒屋) 山鹿八一三〇 (吉原町誌)

◎幟 立石柱 一 嘉永六載(一八五二)正月

中西八右衛門 野間 貞次郎 三好市右衛門

小田彦右衛門 小田 半三郎

小田彦四郎 中西 彦九郎

小田 喜四郎 香月 源平

◎鳥居 一 明治十五年(一八八二)一月

小田 彦七郎 高橋 忠次郎 小田 彦吉

野間 定平 中西 幸二 鶴原 茂七

平橋 利吉 小田 彦治 白石 八

堀田 甚三郎 中西 藤次郎 久 一

田川 〇〇 重岡 四郎 堀沢次右衛門

三門市右衛門 守田 吉平

渡多野 忠藏 秋山 〇〇 忠平

小田 〇〇 〇〇 〇〇 井上 基平

堀田 〇〇 三村平右衛門 野間 藤兵衛

中西 只平 中西 〇〇 津田 徳平

小田 安郎 小田 彦十郎 占部 兵次郎

大山 惣兵衛 〇〇野善右衛門

岡崎 〇〇平 戸田 吉平

香月 善藏 石田 徳藏

塩田 武 久枝 吉 〇本 又七

稻永 久四郎 清水出右衛門 守田良石工門

守田 安平 重松 仲助

中州 市平 〇〇 三郎 石川 〇〇

橋本 久次郎 橋本 又平 野間 利平

森 市次

◎水盤 一 昭和七年(一九三二)三月 社掌 千々和英一

千船 組 田中 忠雄 石田 新吉

熊野 貞十 坂尾 春吉 井上 金兵衛

古永 岩太郎 藤原 氏 伊豆 利行

縄川 恒次郎 三好 萬太郎 三原 レイ

◎庚申 尊天 一 寛保二年(一七四二)九月魚町商人中

堀田 彦大 神 一 文政五年(一八二二)四月

小田 彦七郎 野間 定藏 野間 藤兵衛

中西 友次 小田 彦十郎 平橋 利吉

塩田 孫藏 井上 弥吉 中西 百松

明治十一年(一八七八)六月礪石再建

◎社殿 一 祭神不詳

※戦後数年まではこの高い所にあり石段も相当に高かったが、道路拡張の際に山を削って現任の位置まで下した。

※城山神社の夏越祭り

城山神社では毎年七月三十日を祭礼日として、夏越し祭りが

催される。時計がやがて七時をさすころ、笛太鼓に誘われて

社前に近づく、麻の葉や人形や紙座を下げた大きな茅また

は菰の輪が、二本の竹に結ばれて鳥居一杯の大きな輪につくられている。祭典が進行して輪越しの行事に移ると、宮司の先導によって参拝者は先ず茅の輪の門の前に立ち「思うこと皆つきねとて麻の葉を、きりにきりても抜いづるかな」と歌い輪をくぐって左へ廻り、前の位置にもどって第二回目の歌「みな月のなごしの枝する人は、千歳の命のふと云うなり」と歌って右へ廻り、更に元の位置に立って第三の歌「宮川の清き流れに横せば、祈れることのかなわぬはなし」と歌って二度輪をくぐって左へ廻るのである。この輪越しの行事によって、身体のがれを清め、流行病の多い夏を無事息災で暮らそうというのである。祭典が終ると氏子によって神輿の行幸が始まるのである。（芦屋の葉）

24

城山庵 ― (三軒屋) 山鹿六―二七入る

以前雁木区城山の北西側中腹にあつたのだが、芦屋橋よりの貫通道路が出来た為に山が削りとられたのでこゝに移設されたのである。

③島郷四国第七十四番札所の石標 ―

六地藏尊移転新設 昭和五十年（一九七五）八月

畑野善亮 中西虎太郎 安部クラ 橋本スエ

④地藏堂 ―

島郷四国第二十番札所

本尊 地藏菩薩

25

⑥平家供養塔 ― 昭和五十年（一九七五）八月移転
三軒屋上組
安楽寺 ― (三軒屋) 山鹿一―三九

金龍山と号す、真宗本派西京本願寺末なり、本尊阿彌陀如来（立像一尺七寸）春日作といわれる。寺伝に元暦元年（一一八四）山鹿兵藤次秀遠の創立する所と云う。元は真言宗にて神護寺といえり。昔の形見とて一金龍山真護寺と彫刻せる石片を所蔵せり。青石なれども頗る古雅なり。其の後寺も継続し来りしを元暦元年（一二七〇）順教と云う僧真宗に改めたりと云う。（一説には中興改宗の僧を玄宿といえりとかや）正徳元年（一七一）六月寺号木仏を許さる。寺内に大師堂あり、これ真言宗たりし時の遺物なり。（遠賀郡誌）

⑦門 注 ― 明治十年（一八七七）初秋

中西 藤兵衛 倉野 源寿

⑧總門（金龍山） ― 明治二十二年（一八八九）建築

⑨轡藏 付 経藏 ― (県指定有形民俗文化財)

(説 明 板)

輪藏、経藏ともほぼ完好であるが、傳人士、職人は破損している。輪藏には鉄眼板一切経二〇、巻を取め、総繪造り

で釘を一本も使わずにすべて組込みで八角形に造られている。この輪蔵付経蔵の寄進者である倉野儀兵衛義知は家号を「吉野屋」といふ伊万里焼陶器を広く本州まで販売する豪商で、安政元年（一八五〇）美濃（岐阜県）大垣で病死した。

生前儀兵衛が吉へ布應していた一切経を嫡子義寿（画号煙閣）が父の志を継ぎ一切経の不足を補って完成し、安政五年（一八五八）に寄進したものである。

※輪蔵は一切経を収納する大きな母架で、中央に軸がありこれを回転して、必要な経典を取り出す仕組になっている。
※傳大士ふたいし又はふだいじという。中国南北朝時代の在俗仏教者、名は曇（きん）蓋（がい）大士・東陽居士ともいう。双林寺を建て、住し、大蔵経閲覧の便を図って輪蔵を考案した。

◎経蔵 碑 — 安政五年（一八五八）八月

表に只築院釈高寸淨哲居士と法名が刻んであるがこれは墓碑ではない。他面に経蔵建立の経間などが誌されている。一切経の不足を補って完成したときに義寿が建立したものである。

※倉野儀兵衛義知「屋号を「吉野屋」といふ、代々伊万里焼商人として名をなした豪商である。天保三年（一八三二）九月伊万里と芦屋の商人とが、共同して岡湊神社に献納した式目献燈には吉野屋七作の名が刻んであり、吉野屋友次郎は弘化三年（一八四六）頃の有毛・鶴田・脇浦の旅行商人の頭取であった。

嘉永三年（一八五〇）秋、現在の伊万里市立町の天満宮に前田治左衛門を発願主として建立された密進華表一基がある。これに吉野屋儀兵衛と名前が彫り込まれている。倉野儀兵衛義知は本姓佐野氏だが倉野の養子となり吉野屋を継ぎ、伊万里焼旅行商として広く関東まで販売する山鹿の豪商であったが、安政元年（一八五〇）十二月美濃の大垣で病のため四十七才で客死した。（吉野町誌）

◎本堂 —

②凍壁 — 安政二年（一八五五）初冬

◎鐘樓 —

26 地蔵堂 — （三軒屋）山鹿六一一匹

◎堂宇 —

島郷四国第三十八番札所
本尊 延命地藏菩薩

27 鹿門饗舎跡の碑 — （三軒屋）山鹿七一四

（碑文）

明治五年（一八七二）山鹿教育の先覚者林次敏は、福岡県より第十区（島郷一門及戸畑・枝光・中原）の戸長手伝兼山鹿魚町副戸長（今の町村長）を命ぜられ、翌六年山鹿村副戸長浜中茂足と相謀り、三軒屋中西幸藏の家屋を借りて、鹿門饗舎と名付け私塾を開いた。明治八年（一八七五）十月山鹿小学校と改

稱、同十五年（一八八二）五月山鹿字西ノ浦に校舎を新築し移転するまでの間、多くの生徒を世に送り山鹿小学校の基礎を確立した。

28

現在残っている唯一の芦屋町民家（野口家）——（熊本区）

山鹿七一六

終戦直後はまだ数多く残っていたのだが、家の中が暗いのでガラス戸に改造したり改築したので、今は此の家が唯一の物で、芦屋町民俗資料として保存したいものである。

29

山鹿村役場の跡の碑——（三軒屋）

山鹿九一一七

明治五年（一八七二）それまでの船を区、船戸を戸長、庄屋を副戸長と改めた。同六年大区小区制が布かれ山鹿村・魚町・柏原浦は第五大区第二十四小区となった。のち幾度かの制度の改革があったが明治二十二年の町村制施行により山鹿村となった。明治三十八年山鹿村は芦屋町と合併した。それまでの山鹿村役場はこの地に置かれていた。

30

大願寺——（万町区）山鹿一三一一

大願寺は舊乗山と号す、本尊阿弥陀如来（坐像高二尺）開山型光上人作と云え腹帯如来と云う。浄土宗鎮西派本山西京智恩院に属し中本山たり。開山聖光上人願院建保二年（一一二一）創立す。此の時の領主麻生氏の菩提所なりしと云う。

文禄三年（一五九四）の火災に焼失して其後は草庵を結び居たりしを、慶長七年（一六〇二）経啓利頼と云う竹中興せり。方丈は宗祖明照大師七百年忌記念の爲め、明治四十四年（一九一）順家中の建築する所なり。（費貳千円を要せりと云えり）

（遠賀郡誌）

◎総門——

◎鐘楼——明治四十年（一九〇七）一月

◎維持会創設碑——昭和十七年（一九四二）一月

◎三好徳松報恩記念碑——昭和四十年（一九〇七）八月 三好徳松

◎水盤——明治廿年（一八八七）七月

◎石井翠女の句碑——昭和三十四年（一九五九）七月 堀江ユキノ

◎月生るゝ織きひかりの春北風 翠女

（裏面）

石井翠女 本名 カツエ

昭和二十四年（一九四九）以来岸秋溪子の指導により作句をはじめ雲母に属す。昭和三十三年（一九五八）表記の句により飯田蛇笏選の毎日俳壇賞を受く。福岡県立直方高等学校在職中同年十一月二十七日四十二才にて逝く。

◎本堂——

島郷四国第三十番札所

本尊 阿彌陀如来

※本尊阿彌陀如来を腹帯如来ともいう。

香月吉祥寺にもある。吉祥寺のある所は聖光上人の生誕の靈場で、当時香月城主の家臣であった古川彌左衛門則茂の子に生まれ、難産のために没した慈母の冥福を祈り出家し、座寮の跡に寺を建て、腹帯阿彌陀如来像を刻んで、その寺に納めた。山鹿大願寺は聖光上人の開山である。原本のものと部分で吉祥寺にある腹帯如来を刻み、すえの部分で刻んだのが大願寺にある腹帯阿彌陀如来であると云う。

(遠賀郡誌)

◎惣本山 知恩院 直末表碑

天保六年(一八三五)九月

秋枝八郎廣温 野間藤右衛門 藤江政右衛門

桑原定右衛門

◎六角堂

白石直太郎の父字八(卯八)が、祖先冥福供養のため建立したものである。家号は「こはた屋」とて米屋をしていた。

31

萬千代神社 (万町区) 山鹿二四一二〇

◎鳥居 (萬千代神社) 大正四年(一九一五)四月

中井藤四郎邦祝

◎猿田彦大神 天保十五年(一八四四)正月

◎本殿 祭神不詳 萬町中

32 観音堂 (元町区) 山鹿二二一五一

臨濟宗で法輪寺に属す。本尊は聖観世音菩薩で行基菩薩の作と伝えられている。昔は善慶禅寺という古刹であったが、現在は一小字として昔の名残をとどめているのみ。

◎老賀の石柱 大正十二年(一九二三)

七十四歳之春

嘉穂郡築村鴨生 金丸 武久

八幡市徳廣町 田中賢一郎

朝倉郡小石原村 北村 音吉

遠賀郡底井野村 明石 菊松

全郡 今村 北村アキノ

◎小野派一刀流

稻永 久四郎 基正之碑 門人中

御許可 明治四十二年(一九〇九)十月十五日

◎卓錫泉の碑 宝暦十三年(一七六三)十一月

秋枝勘次郎廣利拾淨財窓此井以寄附禅慶禅院

◎石垣 基正 七十二才冬

◎石段 明治四十三年(一九一〇)四月

稻永 久 賀父母六十一

◎石柱

◎水盤

◎子安観世音菩薩(坐像)

大正三年(一九一四)十月 百姓町

◎十三 仏 一 大正二年(一九一三) 波多野 忠成

◎弘 法 大師(立像) 南無大師遍照金剛 一

弘法大師千百年御遠忌記念 昭和九年(一九三四)一月

堀江幸太郎 鶴原佐七 鶴原福松 柴田多平

◎堂 宇 一

島郷四国第三十二番札所

本尊 十一面観世音

西国第十八番札所

◎観 音 堂(金剛寺) 一

島郷四国第一番札所

本尊 弘法大師

33

秋 葉 神社 一 (元町区) 山鹿二四一、二

祭神 加邇突智神

◎秋 葉 神社(石体) 一

◎猿 田 彦 人 神 一 天明三年(一七八三)正月

※終戦後も幾年かは社殿もあり、小さいながらも鳥居があったのだが今は無い。道路拡張の際麻生神社下に移設した。この社を出入は庚申さまと言っていた。社殿では祭りの日に波多野宮司によりお夜いもありお籠りもあっていた。又青年宿にも使われていた。

34

御 廟 所 臺 地 一 (元町区) 山鹿二四一(のはずれ)

この臺地より麻生神社のある所までの丘を、俗に御廟所と云

われ、小字名にも残っている。御廟所には「みたまや」という意味がある。この丘に麻生神社があることかう、この名があるのではなかるうか。

◎小 川 又 之 助 之 碑 一

大正二年(一九一三)十一月

発起人 力若幸行五門 栗岳徳吉

熊本吉田司家より九州村撲頭取を下付された。

◎麻 生 友 七 碑 一 明治四十二年(一九〇九)三月

福原 直次郎 本田 梅吉 深川 鶴三郎

小林 菊造 大場 伊六 岡田 富造

白木 伴作 長畑 平次郎 小田 吾松

中西 九三郎 仙助 宮野 俊太郎 廣渡 喜三

藤江 仙助 井上 徳太郎 藤嶋兵右門

原田 伊太郎 白橋 代次郎

波多野 兵市 源太郎

上田 源太郎

◎中 近 米 古 之 碑 一 大正十一年(一九二二)四月

重岡 源市 小田 喜助 重岡 兵七

七橋 益太郎 畑野 善十 坂尾 越次郎

小田 吉松 藤崎 百松 坂尾 春吉

鶴原 彦太郎 中橋 藤平 古場 源次郎

堀江 勝四郎 井上 吉助 藤崎 清三

中橋 藤四郎 小田 辰吉 田中 弥作

空閑 森吉 小田 文次郎 井上 甚太郎

坂尾	兵次郎	小川	ツル	塩田	平吉
中西	直吉	小川	傳次郎	藤江	友次郎
安道	龍吉	橋本	又吉	藤崎	清作
三好	嘉造	塩田	萬太郎	三好	勝太郎
大石	萬十	多々野	磯五郎	塩田	久次郎
三村	芳太郎	中西	藤一	縄田	定平
小田	兵一	守田	弥之吉	守田	源十
守田	傳五郎	白石	新五郎	小田	原茂三郎
鶴原	忠五郎	吉永	岩五郎	小田	彦次郎
小田	松三郎	濱中	益吉	太田	正次郎
坂口	勝太郎	新野	吉太郎	入江	徳太郎
藤ノ木		中西	莉子	小川	作十
内山	彦次郎	長尾	喜代次	重岡	三造
石松		重岡	銀造	久野	仁七郎
重岡	政次郎	小川	作次郎	守田	仙太郎
三好	三頭	宮川	忠七	清水	重吉
井土	与六	入江	甚六	古賀	忠蔵
田中	兵太郎	古賀	忠蔵	上野	伝吉
吉住	徳松	重岡	忠蔵	重岡	幸太郎
中野	与作				
大石	君				
江藤	安太郎				

35

はた 民俗資料室 (元町区) 山鹿二二一四

※中西米吉は芦屋綿業組合の組合長を永く勤め、また芦屋町会議員として大正十三年二月より昭和六年十一月まで、芦屋町政に参與した。

林	調太郎	波多野	林造	土橋	徳次郎
村川	善吉	和田	徳郎	鶴原	忠六
上川	三造	野中	廣吉	江藤	与三郎
空閑	初次	川原伊右衛門	波多野	定蔵	
吉永	勘次	田中	喜一郎	縄田	敬助
三好	勝三				

36

タガヤ 美術館 (元町区) 山鹿二二二二

祖父の代、父の代(明治から大正時代)に家で使っていた雑物が、六メートルほどの陳列にゴタゴタとならべてある。古い物では天保九年(一八三八)と黒書きがしてある、一四四年前に作られた行燈組み込みの繊細な細工がしてある硯一式付きの小さな箱枕がある。明治二十四年、明治二十八年に作った祖父母、父家族の硝子板の写真が桐箱に納まっている。新案特許の銘板のついた手動式按摩器。大正九年第一回国勢調査のとき父が佩用した調査員徽章一式や第一回国勢調査記念に八幡市がだした記念の本杯が一組ある。大正時代の芦屋町風景絵葉書や煙草民営時代の刻み煙草の包装紙など・・・

生家に腰をすえて創作に取り組んでいる。西欧古版画のコレクションを主体に、自作物を加えたタガヤ美術館を開館している。グラスや磁器、銅、織物などそのキャンパスも多種多様で、実験的なこころみを買いたものが多い。(芦屋ガイドブック) 芦屋町庁舎及び北九州市庁舎内の大壁画は多賀谷伊徳伯伯の作品である。

法輪寺 — (元町区) 山鹿二二・七

法輪寺は佛海山と号す、禅宗臨濟派博多崇福寺末なり。此の寺頗る古刹なりと雖も僧哉開基の年暦等詳ならず、初めは貞吉宗なりしと云う。中興開山を藏海珍和尚と云い、応安七年(一二七四)此の寺を建て是より禅宗となれり。昔は大方なりしが兵乱後漸く衰微せり。(遠賀郡誌)

(説 状 板)

銅製経筒(一山) — (県指定考古資料)

法輪寺境内西の谷から昭和二年(一九二七)八月に発見されたものである。寺伝によると文政六年(一八二三)に出土したものを再埋納したものと云われる。青銅製円筒型の経筒で、経筒約十四廻、径七廻、線刻で蓮華文のある平たい蓋と幅の広い台がついている。筒身の銘文は

妙法蓮華経全部八卷

奉為関東御曹司千存御前

相当一百箇日忌景御為誠

罪生善頼証菩提、日頼守供養如右

徳治三年(一二〇八)正月廿二日

導師 遍照金剛澄空

勸進 遍照金剛聖鑒

母儀菩薩戒尼遍照金剛清浄覺 敬白

とあり徳治三年に当地の豪族山鹿氏が関東政權のために供養したものである。

◎門 柱 — 大正五年(一九一六)六月 吉永惣次郎

◎五 輪 塔 — 貞享四年(一六八七)十月

空風火水地 極点妙香信女淑恵

◎漱 鉢 — 明治三十四

◎宝 篋 印 塔 (妙典一字一行) —

天保九年(一八三八)七月

濱中又三郎茂陵拜写 男又右衛門茂群建塔

奈芦屋中ノ浜海雲寺にある宝篋印塔と共に芦屋町における

江戸時代作宝篋印塔の代表的なものである。

※境内には五輪塔・宝篋印塔五重層塔が数個ある。

◎本 堂 —

中興開山の藏海珍和尚は、鎌倉円覚寺五十六世の住職であった。応安七年(一二七四)芦屋に来られてこの寺を開いたが、当時の状態では円覚寺の住職であった高僧を招くという事は並み大低のことではない。当地方で相当な権力者

でなければ出来ないことである。が其のいきさつは寺が焼失して何も残っていないので調べるすべもなく解らない。

鎌倉門覚寺の流れをくむ臨済宗の寺は、九州ではこの法輪寺のみであるが何時の世からか博多の崇福寺（大徳寺派）の末寺となり現在に至っている。戦火にあいさびれた時代もあったのであろう。昔は寺地も広く大きな伽藍がそびえていたと思われるが焼失してしまつて其の跡形もない。今の本堂も焼けたあとと再建したのであろう。柱下台石にはそこらにあつた五輪塔や法篋印塔の角石が使われている。この本堂は盛んなりし頃の禅堂ならんと。（桐畑端峰師談）

◎佛舍利

釈迦の遺骨で小さな五輪の水晶の容器の中に納められている。これはどの寺にも有るというものではない。法輪寺伝来のものである。いかに名刹であつたかがうかがわれる。

◎銅製経筒

（県指定考古資料）

昭和二年（一九一七）八月境内西の谷より発掘したもので、その形状は青銅製円筒型、高さ一三・九釐、口径六・八釐、台径八・五釐、蓋は外径八・五釐で蓋の上面には線刻の繊細な蓮華模様があり、製作技術の優れていることがわかる。銘文によると鎌倉源頼家の子供千寿御前の没後、白河忍供養の為に作られたもので徳治三年（一二〇八）一月二十二日清浄梵尼が祭主となり、千寿御前の霊を弔うために盛大な供養を行い、千体地藏と妙法蓮華経八巻を納め埋められたものである。（芦屋町誌）

◎鐘楼

◎菩提樹

この寺の菩提樹は明治三十年頃の火災にあい焼けたそうである。その焼け残りし枯渴寸前の古株から出た萌芽が成長したものである。現十八世桐畑端峰住持の「鎌倉の門覚寺、建長寺からはなれ、京都の大徳寺を本山とするに至つた時点かも知れない」との言葉をかりれば、三百年前になるも、あながち無定見な推察ではないとも思えたが、いつ須誰の手によるものか一切が不明、確たることを知るよすがになる何物も無い。端峰住持はシゲシゲと見あげ「こんな立派な菩提樹は少ないですパイ」とほこらしげに語つた。

（尚六号 加藤一夫）

◎宝篋印塔

これは千寿御前の墓といわれている。

※経筒の銘文とは別にこんな話もある。山鹿城主麻生氏の系図によると、初代といわれる麻生家政の女房は高倉院白姫で、この人は大変な美人であつたと云われている。紅梅姫とも呼ばれていて、没後はこの法輪寺に葬られたが、千手御前の墓というのはこの人の墓のことで、白姫の母は安徳天皇の母君「建礼門院」であつたとされている。経筒の銘文にある「千寿御前」とこの「千手御前」と関係があるかどうか、そんなことを想像することともまた歴史の面白さではないだろうか。（芦屋ガイドブック）

⑤五輪塔と石仏

文政六年（一八一三）三月本堂の家屋を補修せんとて、寺の西の谷より土を取りしに、高さ四尺ばかりの五輪塔を掘り出せり、其の廻りに立し塔と見えて小き五輪塔五十余出たり、又石仏十六体あり高さ壹尺七寸八寸或は壹尺ばかり、其の側は小石をもつて埋めたり。經石なるべし、其の下より銅造の經筒出たり。（遠賀郡誌）

※当時の人々は仏の崇りを恐れて再び旧地に埋めたものと伝えられていたが、昭和二年（一九一七）八月に再び発掘されたのである。

※文政六年に発掘されたものの中に応徳元年（一〇八四）と刻まれたものがあつたと遠賀郡誌に記載されているが、現存するならば五輪塔では日本で最古のものである。

※本堂の礎石に使われているこれらの石は、かつてはこれ等の五輪塔や法靈印塔の台座であつたものと思われる。中に平盛康と読まれる文字が刻まれたものがある。

（雲山に上る）

⑥法輪寺本堂左手より雲山に上ると地藏堂があつたのだが、今は無い、最近になつてそのあとに見晴し台（休憩所）の小屋が建っている。

島嶼四国第九番札所

本尊 釈迦如来

⑦仏像（三十三体）――

世話人 石田 明峰 上田 房吉

妹尾 秀二 徳田実太郎 柴田竹次郎

野中利太郎 岡崎 柳吉 坂尾越次郎

桑原 スイ 久我 アキ 村田 タケ

⑧延命地藏尊（坐像）――大正十二年（一九二四）七月

折尾町 野中友次郎 北古賀熊吉

脇松吉 川又 関次

山鹿 野中利太郎 野中喜三郎

⑨跋闍闍尊者――

明治四十二年（一九一九）

小田 伊平 畑野 善石三門 波多野 忠蔵

⑩大聖文殊菩薩 昭和二年（一九一七）五月

波多野 龍雄 近松 恭順 桑原 宗重

鶴原 角平 藤崎 国太郎 入江 芳松

石出 明隆 吉永 泰山 縄田 恒次郎

熊野 貞十 野間 徳蔵 吉永 忠太郎

田中 政助 野中 秀吉 坂尾 春吉

吉田元右三門 野間六石三門 中西 楠郎

藤崎 百太郎 岡部 雄策 堀尾 壽郎

守田 又次郎 堀江 勝四郎 中嶋 頭十

重満 善太郎 重岡 仙太郎 守田 銀太郎

末口 傳 外

◎大行普賢菩薩

(坐像) 一字一石經典 1
昭和三年(一九二八)十一月

塩田	久七	松田	勘助	佐野	傳次郎
佐野	與平				
小田	福次	岡村	勘助	加藤	百松
吉永	品次郎	中山	万太郎	野中	福太郎
野中	駒吉	久我	関次郎	松田	源八
藤田	伊七	重岡	梅吉	重岡	幸太郎
小野	国太郎	吉永	真	石田	明峰
井上	勝次郎	大貝	鶴松	小川	文太
小川	米二郎	吉永	李太郎	多賀谷	伊之吉
鶴原	亀吉	中西	吉助	中西	半兵衛
藤崎	平市	福田	惣七	徳田	勘右衛門
三原	清	三村	芳太郎	柴田	作次郎
白石	榮次郎	重岡	房吉	久野	兼吉
本田	厚太郎	鶴原	忠五郎	水上	恒太郎
本田	友七	加藤	弥一	鶴原	達雄
佐野	傳一				
中西	駿四郎	中西	市郎	野口	善作
塩田	善藏	吉永	壮助		
鶴原	庄次郎	藤江	雲吉	藤江	勝次郎
江藤	與三郎	鶴原	繁喜	外	

38

金毘羅神社 (元町区) 須賀神社の裏山

(法輪寺裏山三十三仏より左側を上る)

◎石祠 明治三十年(一八九七)十二月

祭神 尊原醜男神 崇徳天皇

石祠の中に金刀呂比賣堂神・琴比賣堂神の本札がある。

波多野	定七	戸田	吉平	重岡	傳四郎
井上	喜次郎	中西	徳平	堀江	甚市
吉永	宗次郎	平橋	磯石工門	秋	孫十
波多野	忠藏	藤崎	清吉	小田	忠匹郎
兵道	忠三	中橋	藤次郎	鶴原	茂平
柏原		縄田	庄次郎	川原	佐平
田屋		重岡	勝平	重岡	久次郎

※川船の船頭衆が主になりお祭りをしていた。

39

須賀神社 (元町区) 山鹿一九一八

祭神 建速須佐男神 奇稲田比賣神

狩尾神社の祭神をも合祀する

◎職 立石柱 元治元載(一八六四)村中若者連中

傳十	長四郎	貞平	又兵衛
源次郎	治七	次郎	藤平
徳三郎	勝平	治平	

◎百度 石 天保十四年(一八四三)六月

米屋又右門 姓一屋半三郎 榮松屋貞兵衛

石屋 才七 舩屋 弥吉

◎島 居 (祇園区) 一 天保六年(一八三九)八月

濱中又右衛門茂藏

◎玉 垣 一

小田 彦十郎 萬屋 次七 船津 幸平

舩屋 弥吉 蛭子屋久五郎 蛭子屋清兵衛

吉屋町大保正格 小野 清次郎

吉屋町大保正格 關屋 彦兵衛

萬屋 清四郎 簡田屋 定七 常盤屋久右門

柏原浦保正 秋枝 勇五郎

中西 幸藏 中西 藤四郎 小田 半三郎

與屋次左門 魚屋 重兵衛 龜枝 關五郎

中西 彦九郎 崎 傳次郎 中西友右門

大保正格 林 幸藏

堀江 吉助 多賀谷伊三郎

修多羅村大保正 楠野 太一郎

大城村大保正 松井 仁十郎

柏 原 釜津屋利兵衛 縄田正右門

桑原定右門

大保正格 小山 彦五郎

吉野屋 能平 田中屋忠兵衛 舩一屋想十郎

秋枝 八郎 野間藤右門 野間定右門

田中屋 勘助 小田 彦藏 濱中勘右門

井上 甚五郎 釘屋 吉平 新屋 文匹郎

徳永 托太郎 小河 養律 藤我 生民

井上 其作 平橋 喜次郎 吉田屋 仙助

堀田嘉左門 野間 清三郎 小川 作十郎

◎玉 垣 修 綱 鋪 道 新 設 密 附 銘 石 一

旧寄附老子孫イロハ順 昭和十一年(一九二六)七月

楠野 太一郎 舩一屋 敏子 堀江 吉郎

峠 勝兵衛 小田 祐三郎 小野 清次郎

釜津 ハツエ 中西 芳太郎

中西 元吉 堀田 高次郎 野間 徳藏

野間 新 倉野 儀八 桑原定右門

秋枝 地主 林 清三郎 小田 哲夫

中西 藤一郎

野間 一定 小田 四郎 小田 シナ

田中 政助 多賀谷 三郎 田中 彌助

堀田 茂 平橋 和作 井上 茂夫

小河 作十

寛 超 者 藤江 熊太郎

世 話 人 堀江 幸太郎 吉永 米平

縄田 恒次郎 中西 健一郎 野口 喜之松

藤野 貞十 江藤 仙太郎

◎環 田 彦 大 神 一 天明八年(一七八八)

明治廿七年(一八九四)一月再建

◎島 居 (祇園区) 一 享保十一年(一七二六)正月 産子中

⑤ 鋪 石 寄 進 の 碑 — 嘉永三歳（一八五〇）六月

倉野 儀兵衛 高橋 忠兵衛

⑥ 奉 獻 の 碑 — 昭和十一年（一九三六）七月

三原 清 柴田 太平 鶴原 龜吉

三村芳太郎 中西 占助

⑦ 燈 籠（式口燈）— 天保十五歳（一八四四）夏六月

山鹿魚町庄屋大庄屋格 小田 定行工門繁口

同町大庄屋格 小田 彦一郎當座

同町大庄屋格 林 半藏正敏

山鹿邑庄屋大庄屋格 濱中又右工門茂群

⑧ 凍 盤 — 大正五年（一九一六）初夏

濱中 又兵衛 中西 藤四郎 多賀谷 熊幸

小田 彦七郎 平橋磯右工門

⑨ 狛 犬 — 天保六歳（一八三五）四月 多賀谷 伊七

⑩ 本 殿

⑪ 監 縣 主 祖 熊 野 宅 址 の 礎 —

昭和六年（一九三一）四月 吉田三郎

今は此所須賀神社の境内にあるが、以前はこの石垣下にあった。日山鹿小学校の運動場で此所に居宅があったと云伝う。

※現在福岡県遠賀郡荒垣町大字三吉に西門寺という浄土宗の寺があるが、現住職熊野正思氏は熊野九十二代目の子孫であるという。同家に熊野から当主に至るまでの系図が残されている。（芦屋町誌）

※熊襲征伐のため仲哀天皇、神功皇后が九州入りをした時にはるばる三田尻あたりまでお出迎えして、崗の水門芦屋への水先き案内役をつとめたのが、遠賀郡を支配していた岡県主熊野であった。この熊野は豪勇だけでなく製塩の業にも通じて、富と力と才とを有していた実力者であった。

※大阜の船が崗の水門に入ってから海が荒れて船が動かなくなった。どうしたのかと問われた熊野は「私の罪ではありません、この浦口に大倉主神、冤天羅媛神という男女二神があり、多分この神の祟ではないかと思ひます」とお答えした。その言葉にうなづかれた天皇は、伊賀彦を勅使にして二神を祭られたら、問もなく海は静かになって無事上陸することができたという。「日本書紀」に記述されたドラマであり、神話・伝説の分野に入るものであるが、芦屋の地がその当時から要衝の地であったことを物語るものである。

（ガイドブック芦屋）

※彼の仲哀天皇の「白山鹿岬廻之入」崗浦」と書紀に記されたる崗水門と称するは、今の芦屋藩には非ざるべし。

往古は今の姿は河口浅く渡場の有りし辺は芦など生茂りて、巨船大船などを容るべき姿にはあらざりしが如し。其の理由は左に述ぶべし。但し今の姿となりしも久しき昔なる事は彼の無類詩集の歌連綿が詩などを以ても知らるれ共、上古の崗水門は山鹿の狩尾岬と堂山との間より入りて、芦屋の祇園崎より濱口の辺にて、彼の熊野が「是浦口有男女二神」云々と奏せし浦口は（芦屋町の東南字濱口の南の丘を月軒という、

是れそ即ち大倉主・菊夫羅媛二神を祭れる岡湊神社の旧社地也。是に由て之を觀れば、山鹿は狐島にて、ハゼ島・舟ヶ浦・

日焼ヶ浦・中道などの名今も猶存せり。片屋山鹿の東南、鴨津・若松・鬼津・尾崎・広渡・浅木・虫生津・垣生・東は猪熊・古智・杣・頃末辺までの入海の口なるべし。文禄年間豊太閤朝鮮に軍勢を渡されし時、此の邊に船を集めて渡海せしめられし頃までは、浅川の三頭の上猪熊の辺までは、猶海深くして大船滞りなく上下せしと云へり。然るにいつの頃にか旧湊、山鹿の地西北風の為め、川口埋没して田となり、川上の水悉く今の湊内に注入することゝ成りしより、漸次湊の位置を變じたるは、其の曲折せる地形を見ても察知せらる。況や山鹿の旧湊と認めらるゝ所の地下、尺を掘りうがてば、かき汲出ざる所なく、一尺五寸以下に至れば潮水湧出せり、且つ沿岸には前に述べたる如く浦瀬など海濱の名存せり是其證也。(遠賀郡誌)

④奉 遷 進 の 碑 — 天保七年(一八三六)六月

堀江政右エ門 濱中又右エ門 濱中勘右エ門

⑤改 築 記 念 植 櫨 の 碑 —

昭和十二年(一九三七)五月 百姓町区中

三村 俊造 上野 辰松 堀江幸太郎

藤江熊太郎 生田壮七郎 野中 麻平

⑥石 祠 —

以前この神社垣下にあつた熊鷹神社(岡縣神社)の石祠を明治初年にここに移設したものと云ふ。

⑥役 行 名 の 碑 — 宝曆九年(一七九九)正月

野中 久次

大正七年(一九一八)七月 修繕再献

野中角石エ門 長男 全 茂一郎

役行者 — 山岳呪術者。正しくは役小角えんせうかくと云い、大和国南島城郡孝原かうげんに生れる。三十二才のとき葛城山に登り孔雀明王の像を岩窟に安置して、草履木食し持呪観法して不思議の験術を得たといわれる。また話山岳を踏破し、大和の金鷄山・大峰山などを開いて修業したが、のち彼の呪術は世間の人々をまどわすものであるとされ、伊豆に流された。大宝元年(七〇)一六十八才のとき許されて京に帰えつたが、その後の消息は不明でいつどこで没したかも知られていない。鎌倉時代以後には修験道の開祖と仰がれた。(大日本百科事典)

⑥大 黒 立 像 — 文政四年(一八二二)九月

戎屋 勇八 戎屋 四郎平 堀田屋定右エ門

田中屋伊平衛 戎屋仁右エ門 岩井屋徳十郎

堀田屋善三郎 戎屋三右エ門 肥前伊万里 石工 七五郎

⑥大 神 宮 の 碑 — 弘化四年(一八四七)春

伊勢講 大保正格 小田彦五郎

小川 清五郎 中西友左衛門 野間 定兵衛

野間 藤次郎 船津 幸三 高崎 半兵衛

伊勢講といって、お伊勢参りの講をつくることが江戸末期大変に流行した。おぬけ参り、おかげ参りなどともいつていた。

(本殿右側に)

◎石祠

◎石祠

◎石祠

◎石祠

◎猿田彦大神 — 文政十二年(一八二九)三月

小川 作十郎

40

山鹿小学校校趾の碑と

校門の石柱 — (浦区) 山鹿一七一六

(碑文)

明治六年(一八七三)三軒屋に鹿門養舎として創設した本校も、明治十五年(一八八二)この地に新築移転し爾来九十年、その間校名の改称、校舎の拡張等の變遷を辿り乍ら、特色ある教育の実践と輝かしき実績を挙げ、其の成果は旌表旗を受領する。特に教職員的情熱と地域住民の協力により多くの有為の人材を世に送るも、昭和四十六年(一九七二)新校舎の完成と傳統ある不滅の校風を樹立せし誇りある校舎も取壊さるゝ運命とはなりぬ、あゝ今この地に佇み松籟と颯籟を聞くに追憶胸を打ち、教えしもの学びし者ひとしく感慨に往時を憶ぶであらう。この懐しき学舎の故郷を忘れぬため朝夕仰ぎ見て登

校せし校門を移設して此の碑を建つる。

昭和五十年(一九七五)一月 戸尾町立山鹿小学校後援会

※旌表旗の由来は28戸屋尋常小学校跡の碑の項に記した。

山鹿小学校では旌表旗の歌を作り、校区の氏神である狩尾神社の祭日に、旌表旗を先頭にこの歌をうたつて校区内を行進し、神社に参拜後は柏原の浜で運動会をし、終了後は親子ともども附近の松原にて昼食を楽しむ等、今尚学校の歴史的行事として残っている。(岡五号 柴田正生)

41

遠賀川改修工事 —

遠賀川は江戸時代もたびたび氾濫して、人畜に被害をあたえ田畑を荒蕪させた。明治に入つて十七年・二十二年・二十四年にも氾濫した。各所で堤防がきれ人畜家屋に大被害があり数千町歩の田畑が水没したこともある。戸屋町・山鹿村とも多くの川畔が流失または損壊されて、水がひいてからも生業にさしつかえをきたすような打撃をうけた。明治二十八年にも暴風雨洪水のため遠賀川の堤防がきれ、橋梁が流され人畜田畑に大損傷があつた。同三十八年にも遠賀川はまた氾濫し家屋人畜農作物に大被害をあたえた。米麦の損害三〇万円、炭鉱の損害は三〇〇余万円におよんだ。

改修工事施行区域は嘉穂郡穂波村・飯塚町より遠賀郡戸屋町にいたる本流・支流で延長五六軒にわたる広大なものであつた。改修工事起工式が挙行されたのは明治四十年四月二十六

日である。芦屋町の土地の一部も改修工事用地として買収され、同四十一年十月川敷に編入された。渡賀川河口東岸の山鹿地区の家屋も移転することになった。

山鹿地区の買収筆数(宅地)は次のようである。

浦区	九七筆	雁木区	七一筆
渡場区	一七筆	三軒屋区	六筆
鶴浜区	二筆	本村(元町)	一筆
城山区	一筆	計	一九五筆

明治四十二年五月二日芦屋町で渡賀起工式が挙行された。芦屋地区の工事は大正五年(一九一六)三月三十一日に終了した。(芦屋町誌)

12

薬師堂 (浦区) 山鹿一八一 (奥のつきあたり)

浄土宗大願寺の末庵なり、本尊薬師仏は永禄年中漁人の經に掛り海中より上りし仏像なりと云う。(遠賀郡誌)

◎西国第七十四番甲山寺札所の石標

明治二十五年(一八九二)十月

◎堂宇 (倒壊して今は無し)

島郷四国第九十一番札所

本尊 薬師如来

◎宝篋 日塔 一 寛永二歳(一六二五)二月

秋枝 庄兵衛 同姓 勘次郎

◎漁夫遭難者供養塔 一

元禄十三曆(一七〇〇) 当浦中

当浦於海上 〇〇〇五十八 為頼證菩提

明治二十一年(一八八八)三月再建
中西 仁三郎 野間 作古エ門

※浦区の蔵島神社に池田という社僧がいた。社僧の弟治行衛門は隠岐の島の島浦明神に参拝したとき、美しい女と知り合い、いっしょに山鹿に帰ってきたが、兄が病死したので治右衛門が社僧となった。楽しい生活がつづいたが数年のち治右衛門は病氣のため亡くなった。夫の死後、毎日蔵島神社の神前にぬかづいているうち、女は靈感を得て女うらない師となり、人々から生神様として尊敬された。

元禄十三年(一七〇〇)七月十九日のこと、海上はおだやかであつたが、女うらない師は出漁しようとしていた漁師たちと「今日は悪天候になるから出漁を中止するように」と止めた。しかし漁師たちはきかずに出漁した。夕方から大雨雨になつて漁船は次ぎつぎに難破し、漁夫たちは全員海に沈んだ。遭難者は一五〇余名と伝えられている。予言があつたのである。この事件以来、女うらない師の名は四方にひろがつて、生神様として以前よりもあつく尊崇された。女うらない師の墓は現在大願寺墓地にある。法名本誓妙悟信女、元禄十七年三月とある。(芦屋町誌)

43

高山彦九郎の歌碑 (浦区)

昭和五十六年(一九八一)三月 芦屋町教育委員会
海をひとえの となり也けり 彦九郎正之

(碑文)

寛政の三奇人の一人といわれた高山彦九郎正之は、寛政五年(一七九三)五月二十九日山鹿狩尾宮の神官波多野庸成宅を訪れた。そのとき彦九郎を囲み庸成と浦大庄屋であつた秋枝広成らの三人は、幕府の政治を批判し時世を憂い、夜を徹して談論したといわれている。また浪縣の途にのぞみて深い感慨の歌を残し、六月四日遠賀川を渡り芦屋から筑後に向かい、同月二十七日現在の久留米市で自刃した。

※高山彦九郎正之の「筑紫日記」には、彦九郎が山鹿・芦屋を訪れたときのこと細く書きとめられている。寛政五年(一七九三)筑紫への旅に出た彦九郎は、豊前から筑前に入り五月二十七日小竹を発ち、直方を経て木屋瀬に宿をとり、二十八日木屋瀬から楠橋に出て香月に入つた。中間で杉森社神主千々和氏と別れ、二村に着いて泊つた。二村に入つて宿す、千々和蘭土という、八剱社を拝す、木屋ノ瀬より北二里斗此の辺都て水墓の岡也といふ」と日記に記されている。二十九日は晴、ときどき雨が降つた。この日立屋敷・三頭を経て、山鹿狩尾宮の神官波多野庸成(伊藤常足の甥)方に泊つた。安徳帝の素白山の行在所のことや、津軽の仙女物語(不老長寿のほら貝伝説)なども聞いている。六月一日は快晴、祇園社・狩尾大明神などに詣でた。六月二日は雨が降つた。夜、彦九郎は波多野庸成とおそくまで談じこんだ。山鹿の秋枝広成もきて話にくわゝつた。庸成は和漢の学に通じ、尊王の志もあつた。秋枝広成も好學風雅の人である。「幕府の政治は委任政

治であり、天皇親しく政をとられるのが正道である」というのが彦九郎の信念だつたから、この夜の談論はつづけることがなかつた。三日は朝雨が降りのち晴れた。四日は晴、彦九郎は遠賀川を渡つた。「遠賀川を渡る、百二十五間、右の方重間野の橋の跡坤に渡る、芦屋に橋本とて有、橋杭も有と伝う、渡りて芦屋町也千軒」と日記に記されている。この日は神武社の神官黒山安房守方に泊つた。神武社の由来や吉永清三郎が神武社を再興したことなども日記に書きとめた。五日晴、この日彦九郎は礼服して神武社に神拝したのち芦屋を去つて筑後に向つた。久留米に近い御原村の森嘉膳宅に着いたのは六月中旬である。幕吏の月はずで彦九郎の身辺にそゝがれていた。六月二十六日彦九郎は嘉膳宅で密書類を処置し、翌二十七日自刃、二十八日朝絶命した。彦九郎は勅旨の志をいだいて同志をもとめ各地を巡歴した。芦屋に来て後ちようど一ヶ月後に久留米で自刃している。

※彦九郎が山鹿の波多野庸成家に滞在していた時、狩尾神社の大祭がとりおこなわれ、神官たちが大神楽を奏した。このとき庸成宅にいた彦九郎は、礼装して端坐し、大神楽が終るまで膝をくずさなかつた。謹厳なその態度に見る人はみな胸をうたれたという。(芦屋町誌)

※高山彦九郎の墓(国指定の史跡)

久留米寺町の真言宗光明山遍照院の境内にある。彦九郎の名は正之といふ彦九郎は通称。墓碑の正面には松陰以白居士、左右に自刃した年月日と生国、生前名などが刻まれている。

※波多野飛彈守浦成：

鞍手郡古門村の神官伊藤常行の長男として生れる。山鹿村狩尾宮の神官波多野春信が幼少より山鹿で養育し嗣子となり職を継いだ。正六位下飛彈守に任ぜられ天明九年（一七八九）杜家頭取となる。和漢の学に通じ博學多才談論和歌をよくし著書も数巻ある。尊皇の志もあつたので寛政五年（一七九三）には高山彦九郎も訪ねてきて宿泊している。文化十四年（一八一七）七十七才にて病没。

※秋枝勘次郎廣成：

約一〇〇年間浦大庄屋をつとめた家柄で、波津より山鹿浦・岩屋・脇田・若松に至る海岸のみかじめをしていた。広成の代では三十余年浦大庄屋をつとめている。和歌俳諧をよくし句集も出している。岩屋燈台及び白島の碑は其の白力を以て建てゝいる。広成は亀井南冥に學び特に南冥の弟雲榮と親交深く白島の碑も此の縁によつて完成したのだが南冥を曾む同輩の誹りによつて些細の文意を楮にとり之を壊さしめられた。文化八年七月二十三日伊能忠敬測量の途勘次郎宅に泊った。

「測量日記」に「家作広し、領主も御人ある由」と記されている。廣成の墓は大願寺にあり法名は鹿門院建誓功翁宗休居士。

44

浪懸けの岸（浦区）

（三屋町誌）

高山彦九郎の歌碑より海岸づたいの岩礁浪懸けの岸または浪懸けの岩ともいゝ、山鹿磯島神社下の海辺にあった。昔は大浪懸け・小浪懸けといゝ大岩石があつた。

45

磯島神社（浦区）

弁慶岩というのは海中にあつて直径三メートル、高さ三・五メートルという大きなもので、これと並んで高さ二メートル廻り約一メートルの太鼓岩というのもあつたが、遠賀川改修工事の際石材に使うため壊されて今は無い。（三屋町誌）
※戦前は海岸にそゝり立つ岩壁に打ちつける浪が高く舞い上り、シブキを散らしながらドロップと舞い落ちていた。浪懸けの名にふさわしく勇ましく雄大な眺めであつた。戦後この海岸沿いにコンクリートの遊歩道が出来て、昔の浪懸けの面影をしのばせるものは無くなった。

祭神市杵島姫、稻殿浦嶋子の霊を祭る、其の浦嶋子が子を祭れる由は、寛永の頃杜僧の安部氏が弟に池田次郎右衛門と云える者、商賈の業にて常に隠岐国に行き通いけるが、或るとき彼国の島前郡日置島浦明神の社司某が女に相馴れ終に具し帰りて妻とせり。其の妻我が産神なればとて市杵島姫の同殿に祭りしが、其後宣告ありて里民渴仰し、毎年六月七日には神幸あり今もなを行えり。（遠賀郡誌）

※当日には柿相撲といつて、子供の相撲大会がひらかれ、かつてはその勝者には「もつ」とい（元結）が、敗者には柿が賞品として渡されていたが、現在では学用品が賞品として出されている。

※祭神は市杵島姫命で宗像の沖津宮を祭祀し沖ノ島と共に、海上安全を祈る海の神として漁村浦区の崇敬社で俗に弁慶天

という。浪懸けの海中には華表も建立されている。この鳥居は全体の形の釣合いがとつてもよいとて、わざわざ見に来られる人もあるという。

※平家の守護神とあがめられたこの磯島神社のこの祠は朱塗りである。以前山鹿本村(現在三友建設の屋敷内)にあった恵比須神社もここへ合祀してある。

◎鳥居(辨財天) ― 弘化四歳(一八四七)五月再建

磯島神社下の海中右場にある

大庄屋格 酒中又右エ門□□

大庄屋格 小田定右エ門□種

大庄屋格 小田彦五郎常藤

大庄屋格 林半蔵正敏

吉永 勘七 船津 幸平 小川 清五郎

石工 江崎才七吉秋

中西 只右エ門敏満

田中傳□□□ 小川 作十郎 堀江 吉助

鶴原 □□□ 酒中 □□□ 多賀谷□□□

小田 半三郎 小田 彦十郎 中西 幸蔵

中西友右エ門 小田 彦蔵 野間 貞兵衛

久枝 卯平 塩田嘉右エ門 倉野 儀兵衛

高棟 忠兵衛 船津 幸平 高崎久右エ門

他田次左エ門

◎鳥居(磯島神社) ― 文化十四年(一八一七)八月

山鹿村 我屋作十郎正明

◎磯立石柱(左) ― 嘉永二歳(一八四九)二月

古壺石 孫兵衛 伊三郎 伊七

伊八 林蔵 栄吉

藤吉 吉助 佐七 次七良

次右エ門 藤助

明治廿七年(一八九四)旧九月

世話人 縄田 善兵衛 高崎 新一郎

佐野 興平

小田 源兵衛 小川 又エ門 安永 又兵衛

藤崎 伊エ門 吉永 栄七 吉永 元吉

井上 加賀吉 大良 廣吉 吉部 半市

岡松 太郎 吉永 辰之助 小川 村平

小田 吉之助 武田 廣吉 野中 武兵衛

吉永 要太郎 堀江 春吉 小川 春松

野中 藤助

※磯立石柱のことを里人は「せいどう柱」という。

◎磯立石柱(右) ― 慶応二年(一八六六)

藤三良 久右エ門 好平 長次良

庄次郎 勝十郎 次助 兵次良

勘十 栄次郎 次良兵衛 金十

清次良 茂平 清右エ門 兵七

六次良 藤蔵 儀助 喜次郎 佐市

藤蔵 儀八 藤右エ門

明治廿七年（一八九四）九月

中西 清宗五 津田 孫次郎 松田 源七

中西 春吉 中西 藤太郎 中西 倉吉

小田 伝之助 井上 龍之助 藤江 元吉

福沢 芳□郎 小川 倉吉 二山 □次郎

中西 市太郎 田中 吉太郎 古永 岩吉

高川 □之助 岡 勝太郎 中西 □太郎

◎猿 田 彦 大神 — 天明元年（一七八二）九月 当浦中

◎石 祠（住吉神社） — 昭和七年（一九三二）六月

祭神 住吉三神 山鹿浦漁業組合

井上 龍助 中西元太郎 中西倉太郎

古永 幸一 江藤與三郎 吉永榮次郎

平松 伊助 吉永 久吉 吉永岩太郎

小田 文太 中西 末吉 平安長次郎

安部 秋平 小田文次郎 戎 定吉

三好 勘七 重岡正太郎 波多野貞造

吉田 照吉 吉永 茂吉

小田 武八

◎稻 荷 大明神 —

太地稻荷を勧進し祭る。

◎本 殿 —

46 法 華 宗 遺 跡 — （浦区）山鹿一六—二（堀江正行宅）

◎南 無 妙 法 蓮 華 經 一 字 一 石 の 碑 —

明治三十四年（一九〇二）二月

（八幡）龍崎寺五十八代日誦

藤野 金蔵 堀江定次郎 野田吉兵衛

大石 善七

※日誦上人 — 祇園山龍崎寺第五十八代住職

大保十二年（一八四二）四月七日筑前国遠賀郡前田村に生れ

五才のとき母親に死別、母方（上野姓）の祖母に育てられた。

十三才の春小倉立法寺の日相上人の弟子となり剃髪。江戸・

加賀・駿河・下総国で仏道に刻苦精勵され、元治元年（一八

六四）十一月故郷前田村に帰ったが、父の怒りにあい再び修

業に旅立つ。明治十年（一八七七）千葉縣小湊の誕生寺に入

り、同十三年には僧正の位に叙せられ、誕生寺第九十八代

の榮職にあること六ヶ月、明治十五年（一八八二）宗祖六百

年忌終了して帰郷、前田の地で二十有余年教化の生活に終

始され、明治三十八年（一九〇五）七月二十四日六十五才で

遷化された。龍崎寺のことを里人は日誦さんと呼んでいた

がそれほど仁徳のあつた生職であつた。（八幡市誌）

47 山 鹿 小 学 校 — （元町区）

◎鹿 門 雙 舎 の 碑 — 昭和四十八年（一九七三）三月

（碑 文） 繩手辰 鶴原吉平

山鹿小学校の創始、明治六年（一八七三）三軒屋の地に校舎をもうけ「鹿門養舎」と名づけ授業を始めた。これが本校の創始である。歴史の荒れとともに学校の位置や校名はかわるうとも山鹿精神はいつの世までも永久に受けつがれるだろう。創立百周年を記念して

◎温故知新の碑——昭和五十年（一九七五）一月
旧校地をしのぶ旧校門の石柱といちようの木
（碑文）

この大樹の下に学びて この大樹の風を聞きつゝ
山鹿精神を培ってくれし 心のふるさと無言の恩師

少年が肩あげしこの大銀杏

移し植えてすぐに芽吹ける みどりのいのちは風雪に耐え
子供らを見守って来たたちから 思い出は袴校愛につながり

旧校舎をしのぶこの大銀杏

◎旧山鹿尋常小学校の校門——

他の一本は旧山鹿小学校跡にある

◎山鹿小学校校歌の碑——（裏面に）

藤本春秋子の句（が刻んである）

昭和五十年（一九七六）三月 藤本茂平

緋掛けて 國史く風土記 読みはじむ

48 貴船神社——

旧山鹿本村現在の元町区より柏原に通じる道の左側最初の心

山、貴船の森の上にあり古者はキミ木塚といっていた。
昔は仕置場（首切り場）だったという話もある。

49

麻生神社——元町区より柏原に通じる道の右側で
山鹿小学校北側の小山の上にあり、地主神社ともいう。

※安徳帝同母の御妹にて、平家没落の後、樵夫になった氏尾
藏人に守られて粕屋郡篠栗の立家谷に隠れ居ませるを、麻生
西念法師（時家）が頼朝に請いて自ら彼地に至り背負い帰りに
養育し奉り、後に其の子麻生小次郎兵衛資時に娶せ奉りし紅
梅姫、御逝去の後山鹿に葬り奉りし由見えれば、或は此の
姫君を地主の神と崇め祀りしには非ざるか。と（遠賀郡誌）
※一説には麻生上總介興春の男子の墓を祭ったものだともい
う。

◎鳥居（麻生神社）——明治二十四載（一八九二）一月

◎石祠——明治三十載（一八九七）八月

花崗岩で正面上部に菊の御紋章が刻まれている。昔は社殿
があったが、現在の石祠はのちに造られたものである。

50

逆股の地蔵堂——麻生神社の北側下

麻生神社の真下に逆股の地蔵とて大なる石あり、里人は尊崇
して今も線香の煙絶ゆることなし、里伝に此の仏麻生の神と
相撲して足を取られ墮落されたりと。（遠賀郡誌）

いつの世からか麻生の足取相撲といつて、麻生神社の祭礼の

日には境内に於て、大正時代までは地方の名ある相撲取りが大勢集まつて盛大に相撲大会が行われ、神社下の道には所せましと出店が並び大要に賑わつたという。今は麻生神社の祭礼の当日子供相撲が行われている。

※逆股の地蔵は昔よりたぐり(咳)が癒るとて、願をかけたぐりが癒つたらお礼参りの時に甘酒を造つてあげる風習が今も続いている。

戦前は雨ざらしで、松の木の下に四かゝえぐりの大きな石があつた。現在は堂宇の中に囲まれているが、これが逆股のお地蔵様で、ほかに風化して形もわからなくなつた小さなお地蔵様が数体あつた。毎年八月二十四日の地蔵盆には元町区で供養がある。一体をふごにのせ二人がかりで元町区に運び移して、お水で仏体をきれいに洗い祭壇に安置しお供物をあげて盛大な供養がある。祭壇の前では盆踊りが奉納され、終りにちかずくと假装の人達もふえ、葦々踊りが佳境に入り時のすぎるのも忘れて、踊りを見る人達もなお衣りがたく世話する人も終りを告げる時を失するほどである。

こゝからは響灘の海上一面が見わたせる。魚の群がくると波の色が変わるので、この山上に見張りが立っていて魚群の来たことを浜に待期する漁夫に、どの方向に魚群がおるかを知らせた魚見番所があつた。魚見山というのは、古くから名づけられていた呼称である。

国民宿舎「あしや」のある所で今は展望台もできて、こゝからの眺望は特に素晴らしい、右手はるかに北九州市の白島、左手に玄海の地ノ島を捉えることもでき、夕映えに染まる響灘の景は、良辰美景の絶讃をそのまゝ今に伝えている。

◎万葉の歌 一 昭和四十四年(一九六九)五月

天霧らひ ひかた吹くらし 水茎の

岡のみなとに 波立ち渡る

万葉集 第七巻 羈旅作

大意 空が曇って東南の風が吹くらしい

遠賀川の河口に波が一面に立ち渡っている

羈旅は辞書によると「たびびと」とある。この歌を詠んだ人の名は不明である。

この歌碑は昭和四十四年芦屋町町制施行八十周年を記念して、こゝ魚見公園国民宿舎前の高台に建立されたものである。芦屋町は古くから大陸文化伝来の地として発展し、特に奈良朝時代太宰府政庁のあつた折は、博多の荒津の港と共に政治的文化的交流の要所として、数多くの旅人がこの地を訪れたものと思われる。この歌も誰が作つたかわからないが、旅の途中芦屋に立ち寄り歌つたものである。白波の見える広々とした遠賀川の河口にのぞんだ旅人は、どのような気持でこの歌をうたったのであろうか。

※瀬戸内海から響灘に出た船は、そのまゝ航行するかまた瀬海灣に入つて江川をめけるか、いずれにせよ芦屋津に寄港したものと思われる。博多津から京都へのぼる船も芦屋

津に寄ったであろう。官人だけでなく公卿・僧侶・一般庶人も海路は同じ経路をたどったと思われる。

芦屋津は支路ながらあたかも水駅のような賑わいをみせていたことだろう。芦屋津は島門の駅との関係が深く、また良港だったので旅人の往来が多かった。

中世にかけて芦屋はますます栄え、博多・箱崎につぐ津として賑いをみせた。都を離れ故郷を離れて旅をする人たちが芦屋に立ち寄り、芦屋を詠んだ漢詩・和歌の類の多いことは、人の往来がさかんで、自然に恵まれた芦屋は風物を愛し詩歌を愛する人達にとってこの上ない所だったのだらう。(芦屋町誌・芦屋の葉)

◎藤本春秋子の句碑

昭和五十三年(一九七八)四月

魚見公園国民宿舎石側裏の高台上り口

月の夜の 稲架けあます 古墳の前
この句碑は「浜木綿俳句会」会員たちが、藤本春秋子氏の還暦祝いと同会創立二十周年を記念して句碑を建立したものである。藤本氏は七十、号を迎えた俳誌「浜木綿」の主宰である。

◎野見山朱鳥の句碑

昭和四十五年(一九七〇)八月 浜木綿俳句会

魚見公園国民宿舎石側裏の高台

鵜の渡を 八重の冬波 うちしろめ

この句碑の作品は昭和四十四年二月芦屋海岸で詠われたも

のである。定礎として生前先生が句作に指導に旅行等に巡歴、その足跡を残されたゆかりの地、すなわち北は北海道から南は鹿児島までの全国各地から真心もって寄せられた

石・砂・土・燐火岩・路岩・陶片・埴輪・苔・木の葉など九十余点を埋めてある。こうして真心を籠めて建立した此の句碑は、全国に廻り朱鳥先生の第一号のものである。

野見山朱鳥先生は大正六年(一九一七)南方市に生れる。昭和二十年(一九四五)よりホトトギスにより高浜虚子に師事する。昭和二十七年(一九五二)南方にて俳句雑誌「葉燐火」を創刊、その主宰であった。先生は昭和四十五年二月五十一才にて逝去された。

52

六部塚 : 柏原道右側墓氏宅前

六部とは日本全土六十六ヶ国を回って六十六部の法華経を国々の霊場に納める回国巡礼や諸国修業の他をいう。この六部塚はこの地であれな巡礼がたおれて亡くなった。その供養のため安政年間建てられたものである。又一説には六部に変装した幕府の隠密がこゝで殺されたともいう。

53

狩尾神社第一鳥居 : 柏原道右側

◎鳥居(狩尾宮) : 明治三十一年(一八九八)秋

名順従年長 石田 敦吉 堀尾 長作
藤江 伊七 井上 定次郎 重岡 兵七

縣道開通記念碑——杵原道仁側

大正十二年(一九二二)二月落成

昭和八年(一九三三)四月建碑 小田利三郎

寄附者

貝島 榮四郎 三好 徳松 森生 太七

佐野 傳次郎 田中 新 山鹿各区中

町長 下郡 一成

助役 縄出 高次郎

工事顧問 桑原 宗重

工事委員

中西 四郎平 田中 新 吉永 品次郎

藤江 熊太郎 藤崎 順太郎 重岡 森古

小野 喜八 白石 新五郎 塩田 勇太郎

鶴原 市松 守田 郷之吉

出屋 重岡 伴七 重岡 佐野吉

重岡 勝太郎 重岡 馬吉 重岡 幸太郎

百姓町船主 重岡 源市 守田 藤市

安山 忠七 鶴原 佐七 中西 清七

重岡 傳三郎 藤江 仙十郎 野中 廣吉

塩田 万太郎 古永 角平 小野 竹松

堀江 隆太郎 福田 福太郎 堀尾 壽郎

鶴原 忠五郎

(伝説) 阿弥陀ヶ池趾の碑——杵原洞山入口

(碑文)

昔こゝに傳教大師自作の阿弥陀如来を本尊として、山鹿城主も崇拜した善福寺があった。大内兵乱のとき戦禍をさけるため和尚は尊像を坂下の井戸に納め逃げ去った。ある夜浜中伊右衛門の枕頭に雲水現われ夢でお告げがあり、早速井中を探したところ木尊が出て来た。浦人はこれよりこの井戸を阿弥陀ヶ池と呼ぶようになった。浦人たちの厚い信仰心と、今は埋められてしまった阿弥陀ヶ池を偲びこの碑を建てる。

※昭和三十一年(一九五六)七月道路拡張のある以前、善福寺はこの碑の前にあったが、現在はこの東方三〇〇メートルの所に移転している。この善福寺の本尊阿弥陀如来にまつわる話が伝えられている。大内大乱に際して時の住職は戦禍を憂え、この尊像を坂下の井戸に納置して何処にか逃れ去った。物情騒然の折柄のこと、浦人は尊像の行方を気にする余裕など勿論なく、中には由緒ある此の尊像も戦禍を蒙りつつ紛失し、再び結拝されぬものと思ひ込んだ者も少なくなかった、然るにある夜のこと、日頃から信心厚く神仏の加護に帰依していた浦人、浜中伊右衛門の方の表戸を叩く者があった。伊右

区長 中西 米吉 熊野 貞十

野間 徳藏 塩田 勇太郎 秋枝 正四郎

萩原 珍藏 入江 三藏

柏原 御台場跡 — 柏原洞山入口右側

工門が表に出ると罌粟の衣を纏うた一人の雲水が現れ伊右エ門に対し、当寺に鎮座せる伝教大師作の虎の子大悲の阿彌陀仏は、近江守の乱に紛れて坂下の井戸に沈めてある。其の像を取り出して安置すれば、永く村中全女のお産を守るであらうといふ終るや忽然と姿を消した。夢から覚めた伊右エ門は尊像の求道に狂気せん許りとなり、浦人を集めて井中を捜すと果して阿彌陀如来の尊像現われ浦人は悦んで念仏した。

(芦屋の榮)

縄田益三氏宅裏の高台あたりが柏原御台場の跡という。一説にはこれより南方川原定氏宅前の広場(貝島の別荘があった)だともいう。文久三年(一八六三)福岡藩では藩士を配置して外艦の襲来を警戒させた。遠賀郡には土旅隊長として家老野村益雄が本城に駐在し、若松地方は吉田主馬が主将として若松に駐在した。若松・芦屋・柏原には御台場が構築された。台場づくりには一般農民が動員された。「福岡年代記」によると「文久三年六月朔日若松浦中島砲台築立、七月成就」とあるから、柏原の台場も短期間に造られたものと思われる。芦屋・柏原・若松地方では農民が徴用され、農兵として交代で日夜台場に詰め大砲の打ち方を練習させられた。町人で大砲打方に召されたものもあった。吉田主馬の支配下にあつて郷間方(大砲方)を勤めていた者たちは、足輕にとり立てられ年々米三俵つつ支給されていた。各台場には福岡藩の防備施設

洞山 — 柏原

として明治初年まで残されていた。明治元年(一八六八)六月山鹿魚町の小田彦五郎、芦屋町の善七、宇匹郎の三名が芦屋・柏原の両砲台の筒掛り農兵頭取を命じられた。(芦屋町誌)

延命地蔵をまつる堂山と、洞穴がある洞山の二つの小島がある、これらを一括してふつう洞山と呼ばれている。以前は町有であつたが大正十年(一九二一)九月に柏原区に払下げた。払下げ金額は五〇〇円であつたという。

堂山と洞山の間は干潮時になると岩場続きになるが、満潮時には二つの孤島となりよき景観であつたが、両島のあいだは戦後埋め立てられ、自動車場の駐車場と変つた。また最近になつて柏原漁業組合が漁船の繋船場をつくるため、堂山北側と柏原岸壁との間も埋め立てゝしまったので、孤島であつた洞山も陸続きとなつてしまった。

(先ず堂山より)

◎石 祠 — 大正十年(一九二一)九月 柏原区

以前は堂山右側の岩場の上にあつたが繋船場岩壁をつくるときこゝに移設された。

◎柏原漁港竣工記念碑 —

昭和三十八年(一九六三)三月 柏原漁業協同組合
起工 昭和二十四年(一九四九)八月
竣工 昭和三十五年(一九六〇)三月

組合長 川原 良

旧組合長 金本伝次郎 鈴木麻吉 西田熊吉

本田 光雄

⑥不動明王(立像)——芦屋 林芳太郎

⑦説明板

堂山の千休地蔵と石塔群

柏原には延命地蔵をまつる堂山と洞穴がある洞山の二つがある。その洞山の洞穴の上には平家の公達を祀るという臺があつて、むかしからこの洞山にのぼると馬に乗る荒武者が現われ岩壁から突落されると浦人に怖れられている。また堂山には延命地蔵尊が祀られ靈驗あらたかなものがあり明治三十年ごろ柏原浦にすむ佐野屋の老婆がこの地蔵堂建立を發願しその工事中地下より高さ五、六十廻程の五輪供養石塔及び板碑あわせて三百数十基を發掘した。このように土中に塔塚を築き仏式にのっとり埋められたものは九州では珍らしくその石材として使われている大理石から推定して肥後八代あたりで作られたものといわれている。おそらく平家の恩顧を受けた落人たちが造塔しひそかに船でこの洞山に運び安徳天皇と共に壇の浦に殉じた平家一門追悼のため八万四千の宝塔になぞらい夥しく埋塔し冥福を祈つたものであると云われている。

⑧水盤——大正十一年(一九二二)八月 守田仙太郎

⑨堂山隅地蔵堂——

西国第二十番札所

本尊 延命地蔵尊

⑩堂山の石塔群(千休地蔵)(町指定有形民俗文化財)

⑪蛭子神社——

祭神 事代主命

⑫烏居(蛭子宮)——大正七年(一九一八)三月

柏原区中 縄田 庄七 田中 徳平

縄田 善平、 守田 松太郎 秋枝 正四郎

⑬社殿——

⑭洞山

洞山には高さ約一〇メートル、幅約一二メートル、奥行約三〇メートルの表裏に通りぬけた洞穴がある。この空洞は永年の風化作用によつて出来たものであるが、伝説では神功皇后が三韓征伐におもむく途中、芦屋の地に足をとどめ神明に必勝を誓い、弓に矢をつがえて北方の小島(洞山)を射つたら、矢は小島を貫通しさらに進んで岩屋の里の白島に突きさつたという。矢の貫通したあとが巖戸と共に大きくなつて、現在のような奇観を形成するにいたつたと云い伝えられている。

洞山の下流辺には長さ七〇メートル、横三十メートル程の平たい岩盤があり、千盤敷と呼ばれているが、神功皇后はこゝで神楽を催したともいう。(芦屋町誌)

◎ F22102 下関要塞第二区地帯機の石標 一

陸軍省 第六十号 昭和十年(一九三五)二月十六日
洞山の西北の先端に建て、ある。戦前この附近一帯は要塞地帯といわれて軍事上の機密地帯であった。下関要塞司令部の許可なく写真を撮ることや、風景画を書くことは出来なかった。

山 鹿 貝 塚 (県指定史跡) 一 杵原区北部

水のある所に文化は生れるといわれているように、遠賀川河口の山鹿・芦屋には数千年前から人が住みついていた。石器時代、人は狩猟・漁撈をしその食物の残滓の獣の骨、魚の骨、貝殻等を住居の近くに捨てた。貝塚は石器時代人のゴミ捨て場とみられるもので、縄文式時代の住居遺跡の代表的なものである。山鹿貝塚は東西に約一五〇メートル、南北に約六〇メートル、海拔約一五メートル(路面より最高点七メートル)約九〇〇平方メートルの拡がりを持ち、松の疎林におおわれた小高い死砂丘を形成している。こゝは貝がら山と呼ばれ土地の人に親しまれていた。戦後遺跡の西側海岸に連なる砂丘の一部は、製塩所をつくるために取り除かれた。以前この砂丘は東西に延びていた出で、おそらく東西の長さは二〇〇メートルを越えていたであろう。そしてその西端は直ちに海になつていたとのことである。

昭和二十八年(一九五三)十二月八日の竹中岩夫氏によって石器時代人の遺跡貝塚であることが発見された。

昭和三十一年(一九五五)七月貝輪を右腕に一個、左腕に十一個装着した女性人骨が発見された。(第一号人骨、船津常人氏)
昭和三十七年(一九六二)五月に第一回組織的発掘調査が行われた。当貝塚所見の土器はすべて縄文後期の土器で、中でも磨湾縄文の紋様を有するものが最も多く見られる。この貝塚の代表的土器の観があった。北部九州では従来この式の土器を鐘ヶ崎式と称して、縄文式後期の代表的土器とされている。
昭和三十八年(一九六三)六月戸畑高校社会部の生徒が、貝輪を装着した前腕部を発見した。そのリーダー格座古田勉氏は以前より組織のあった鈴木長敏氏(現在戸畑町立歴史民俗資料館に勤務)にこのことを知らせた。鈴木氏は戸畑町教育委員会にこのことを知らせた。現場では芦屋町郷土史研究会会長岩崎天外氏鈴木氏ほかに町職員数名が立合にて、これを確かめてのち埋めもどした。県文化課にも連絡をした。戸畑高校生徒達がこれを発見した時それ以上に発掘作業をせずに連絡して呉れたことを鈴木長敏氏は「最善の処置」だったと筆者に話をしてくれた。当時のリーダー格座古田勉氏は現在筑上西高等学校教諭で考古学部門で生徒の指導に尽力している。
昭和四十年(一九六五)五月前記人骨を主眼とした第二回目の組織的発掘調査がされた。今回の発掘では人骨が三体出たが二体は成人で一体は乳児であった。これらは並列の形で一つ所から出た。この三体の人骨は芦屋町立歴史民俗資料館に保管されている。

昭和四十二年(一九六八)十一月に第三回目の組織的発掘調査が行われた。この発掘では人骨は一四体で女性四、男性七、幼児二、性別不明一であった。

以上のように昭和二十年から数次にわたって発掘調査が実施され、その結果十八体の人骨を始めとして、耳飾り貝輪等の装飾品や石器・土器片等が多量に発掘され、縄文時代の遺跡であることが確認された。(吉屋町誌・遠賀郡誌)

愛 鵜 神 社 (柏原区) 狩尾神社参道の石俣

祭神 少彦名命

◎水 鏡 昭和七年(一九三二)七月 守田仙太郎

◎鳥 居 (桑嶋神社) 昭和七年(一九三二)三月

杜司 千々和英一

小田 喜助 縄田 恒次郎 野間 徳藏

江藤 千太郎 堀江 幸太郎 佐野 傳一

重岡 森吉 人江 清吉 久野 松次郎

岸原 ヨシ

◎湖 井 石 昭和七年(一九三二)七月

久野むつの外五名

◎社 殿 一

※淡島信仰—要島様

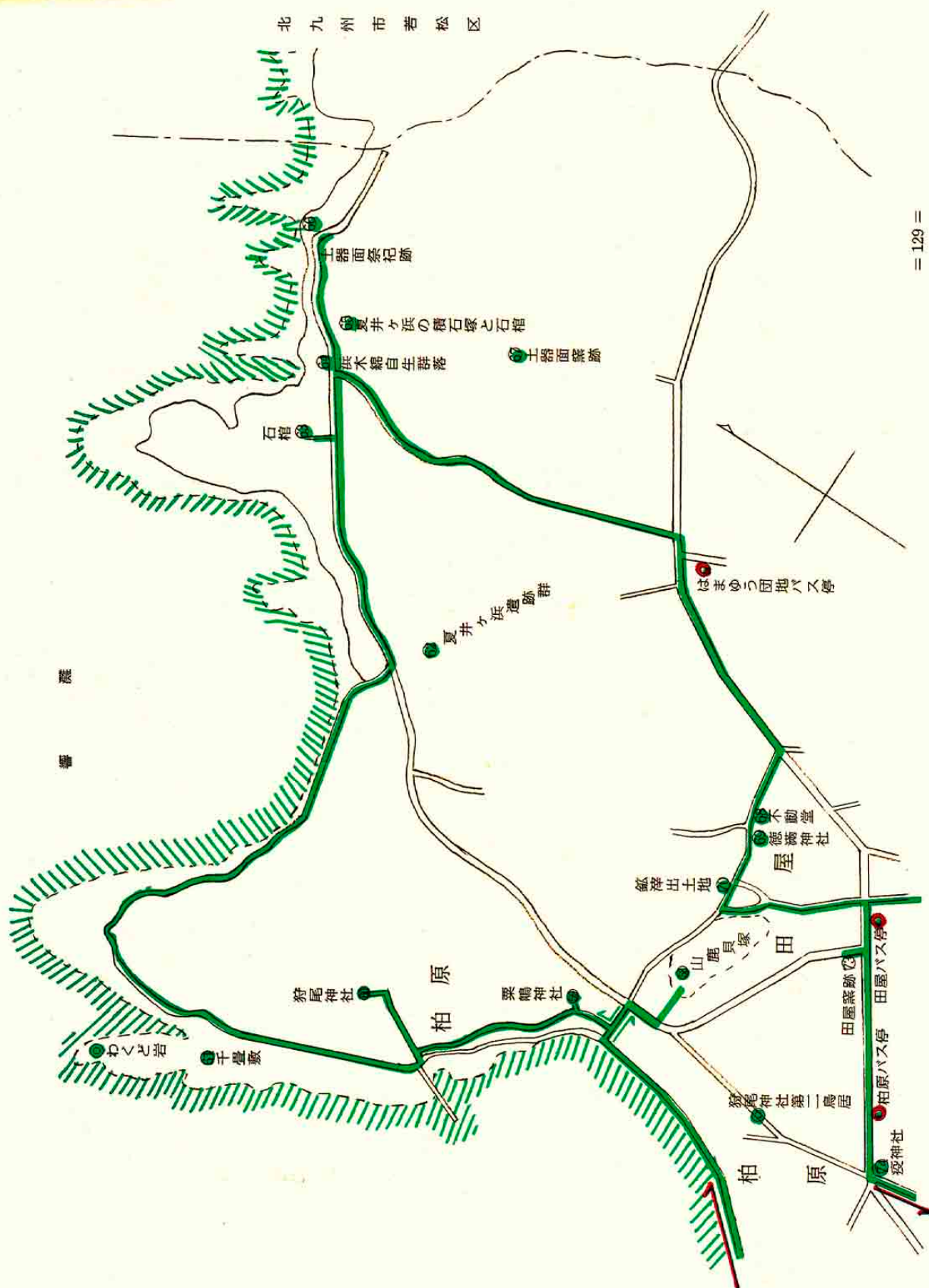
和歌山県和歌山市加太に鎮座する淡島明神(旧称加太神社)に対する信仰である。この神は一般に「淡島さま」とよばれて、

狩 尾 神 社 跡 (柏原区) 狩尾

婦人病に靈驗あらたかな神として信仰されるが、これは加太神社が医薬神たる少名彦命を主神とするのに由来し、また加太の「潜女」がこれを氏神としていることにもよる。俗説では淡島明神は佳古神の妃神で、帯下の病のためうとまれて、この地に流されたという。(大日本百科事典)

※元禄のころ「アリシマ」と呼ぶ一種の乞食願人が淡島明神の神座を背負って諸国を巡歴し、その縁起を声高らかに唱え、婦人病に悩む女性に信仰することを勧めたという。衣類や髪、かけた櫛や簪・織物などを集めて歩く風があった。彼等の建てたという淡島堂が諸所にあり、周辺の婦人達の信仰を集めている。

狩尾山にあり当郡七旧社の一にして今も細社なり、山鹿の産神なり、祭神は中殿に太閤主神、右殿に豊受太神、左殿に天児屋根命、明殿に天手力雄命。山城国石清水に狩尾神社あり是を迎え祭れりとぞ、手力雄命は社の東に戸張神社とて存りしが、破壊しければ此の社に合せ祭れるなり。昔は島郷十八村(江戸を境にして今の若松も含む山鹿島にして乙丸・有毛・安屋・大島・高須・小敷・あま住・弘川・頼田・竹並・二島・畠田・小竹・塩屋・小石・藤ノ木・修多羅・若松)の総社にして、領主麻生氏代々崇敬からざりしかば、年中祭祀繁く社殿も壯麗なりしに豊臣氏神田を没収し、小早川氏国主



となりて麻生氏も民間に下りしかば、社頭も衰えぬれど今も田舎にては好社なり。(遠賀郡誌)

狩尾の地名は天智天皇筑紫巡幸の節、この森で狩をしたことに由来するともいわれている。山鹿区の氏神として古くから祭られ、終戦後も数年間は、例祭のときには古式豊かな御前神楽が奉納せられていた。その後、社殿の損傷もはげしく、現在御神体は元町区須賀神社に合祀してある。

◎第一鳥居(狩尾宮)――元町区より柏原道の右側
明治三十一年(一八九八)秋

世話人及寄附者名は53狩尾神社第一鳥居の項に記す。

◎第二鳥居(狩尾神社)――昭和十五年(一九四〇)十月
(市営バス停柏原より山鹿貝家に行く中間にある)

縄田 高次郎 縄田 恒次郎

縄田 喜美雄 同 喜美雄 同 取助

◎第三鳥居(狩尾神社)――(狩尾宮前の海中にある)
明治三十九年(一九〇六)九月

多賀谷伊七郎殿足 篠崎倉太郎義利

◎神饌幣帛供進神社の碑――

大正九年(一九二〇)十月七日指定

民子総代 田中 新 小田 彦助

小田 伊平 多賀谷 熊幸 鶴原 鶴松

◎鳥居(狩尾神社)――享保十年(一七二五)九月 産徒中

◎石燈籠――寛政三年(一七九二)九月

柏原浦 ナワタや清古

◎鳥居(狩尾宮)――文化四年(一八〇七)九月

柏原浦 中近喜平藏貞

◎石段――

田屋中 重岡 森吉 加藤 彌十

重岡 龜太郎 鶴原 源次郎 重岡 福松

重岡 清次郎 重岡 善五郎 重岡 宅蔵

山原 仲松 堀江 藤九郎

◎石段――昭和三年(一九二八)七月

野間 徳藏 藤江 熊太郎 藤江 清三郎

左野 傳一 三村 芳太郎 宮田 齊松

重岡 金次郎 栗田 竹次郎 塩田 勇太郎

長頭 武一 中西 元太郎 塩田 米次郎

古永 仲太郎 多賀谷 伊織 鶴原 栄次郎

鶴原 角太郎 鶴原 福松 鶴原 霧喜

津川 兵市 中西 芳太郎 縄田 恒次郎

中西 健一郎 中西 藤四郎 野中 利太郎

井上 和吉 井上 龍之助 栗石 平助

堀江 幸太郎 堀江 勝藏 小田 文四郎

小田 喜助 小田 吉松 小田 四郎

亀津 藤太郎 金本 傳次郎 古水 米平

佐野 傳次郎 田中 忠雄 濱中 耕三郎

小田 彦助 田中 新 中村 清八

野口 壽平 三原 清

◎鳥居(狩尾宮) 文化四年(一八〇七)九月

縄田正右衛門英道

◎門柱 明治三十五年(一九〇二)九月 養老会寄附

秋枝 多賀谷伊三郎 秋枝又右衛門

岡田和石工門 田中 茂作 江崎喜右工門

大石 善七 野口 嘉造 重岡久右工門

野間 定造 中西 只平 村田 藤造

猿田 勘二郎 藤崎 平七 塩田 孫造

野間 藤兵衛 堀江 勝二郎

◎石張 十四間 明治三十三年(一九〇〇)十月

田中 勘助

◎石段 十四級 明治二十一年(一八八八)一月

山鹿村 江崎 才七

◎日露戰没記念の碑 明治四十一年(一九〇八)五月

山鹿村 江崎 才七

◎石燈籠 明治三十二年(一八九九)三月

石工 江川村 貝掛則平

◎旅順白玉山表忠塔模型の碑 大正三年(一九一四)七月

岡田孫右工門 武田庄石工門 藤崎 清作

江藤 平七 重岡 傳三郎 林 徳右工門

橋本 又吉 井上 徳太郎 藤江 彦藏

◎狛犬 文化十三年(一八一六)九月 成屋 新七武治

◎石燈籠 寛政五年(一七九三)正月

柏原清 中西 匹良治

◎石燈籠 安政二年(一八五五)秋九月

多賀谷 伊右衛門道足

◎狛犬 享和二年(一八〇二)九月

白石 宇兵衛 吉田 貞右工門

◎石燈籠 天明丙午(七八八) 野口八良右衛門

◎神殿改築記念碑 大正六年(一九一七)五月

神社總代 鶴原 鶴松 小田 伊平

多賀谷 熊幸 小田 彦助 田中 新

寄附者 小田 彦七郎 田中 勘助

佐野 傳次郎 田中 新 小田 伊平

佐野 傳一 小田 富太郎

(社殿の裏)

◎大黒立像 大正四年(一九一五)五月

開業五十年 改修工事移轉記念

寄附者 小田 伊平 小田 富太郎

旧店員 小田 源次郎 柳田 才造

當時店員 石井 彦太郎 吉永 小七

井上 万助 竹井 俊造 早川 金造

花田 保造 立花 親造

韓旋人

大員 幸三郎

兵道

武七

吉永 小一郎

縄田 高次郎

縄田 多喜松

多喜松

縄田 善三

井上 弁太郎

増田 太平

太平

(社殿前の参道右側奥)

◎石 燼 跡 — 安永八年(一七七九)五月

中原浦 四郎左エ門

◎鳥 居 (破損倒壊) — 明治三十九年(一九〇六)

額面に両大神宮・金刀比羅宮と刻んである。

61 下 登 敷 — 柏原狩尾卿

狩尾神社の海中の鳥居あかりから狩尾卿の突端にかけて、浸食作用による石壁が広がり、千畳敷といわれる奇岩の群で、里人はこゝを長磯と呼んでいる。この岩場ではメイタやアブラメがよく釣れる。またサザエやウニもよく取れ夏季のよき行楽地で釣人や磯遊びの人も多い。岩壁の先きの方に蝦蟇岩と言われる凸起岩が、つ見られる、これ自然の妙なり。

62 夏 井 ヲ 浜 道 跡 群 — 山鹿字浜口

山鹿地区の夏井ヶ浜の一部は、弥生文化初期の農耕を開始した地域の一つであることは、この地帯に関連する遺跡や遺物と共に一般に知られている。山鹿字浜口の砂丘は響灘に面して続く海拔二十メートルに満たぬ丘陵地帯で、従来農耕の地として住民により開発されていた。それ以外も戦後の道路工事や開発にともなう材料として、砂取りが数回にわたり行な

われた。この間に採集された遺物などによれば、縄文晩期から弥生早期にわたる貝塚から、貝殻や貝輪、夜白式土器・石床式住居址などが出土している。その後の古墳時代から石棺・墓跡・祭祀址などが発見されこの周辺の台地に、大規模な集落が営まれていたことがわかる。夏井ヶ浜址跡群として知られるようになった。(芦屋町誌)

63 石 棺 — 山鹿夏井ヶ浜

左側の台地の一つは通り道に、一つはその奥左側の敷の中に二ヶ所に露出している。石蓋は早くより無く箱式石棺である。

64 浜 木 綿 白 生 群 落 の 地 — 山鹿夏井ヶ浜

(県指定天然記念物)

(説 明 板)
浜木綿は浜万年草(ひがん花科)ともい、アフリカに原産し、海流や鳥などにより日本へ運ばれたといわれている。万葉集に「三熊野の浦の浜木綿百重なす心は急へど直に逢はぬかも」(柿本人麿)の相聞の一首があり、千余年前すでに日本に白生していたのである。夏井ヶ浜に群生する浜木綿は、七月上旬から花が咲きはじめ茎や葉はたくましく、其の真白い花びらは清楚で気品がありかわいしい匂いの美しい花である。西日本では糸島郡の海岸とこゝ夏井ヶ浜のみに群生し、特に白生群落の北限線にあたっている。

※こゝの「はまゆう」は南海の「はまゆう」の種子が、海流の作

用によって流れつき自生したものであるといわれている。

65

夏井ヶ浜の積石塚と石棺

料亭芦屋釜風呂の裏

夏井ヶ浜古墳は通称夏井ヶ浜の積石塚と呼ばれ、墳墓であろうと推定されていた。昭和四十五年（一九七〇）十一月発掘調査されたが、古墳の一部はすでに盗掘されていた。この古墳は海岸に座する浜辺の石（蓼太の河原石状）をおびたたく積んだもので全体が構成されている。調査の進行と共に発見された箱式石棺は、試掘により自然丘の頂部付近を利用したものであることが判明した。これは夏井ヶ浜古墳とは別個のもので、積石塚以前に構築され、偶然に同地域に位置したものであると思われる。積石塚は鎌倉時代、石棺墓は古墳時代。石棺内からは鉄剣、石棺蓋石上から高杯の破片の出土があり石棺に密接して灰口壺も出土した。灰口壺内部には鉄斧・鋤先・土具類が収納されていた。（芦屋町誌）

※これ等は芦屋町立歴史民俗資料館に展示してある。

66

土器・面・祭・跡 — 山鹿字土器面

古墳時代この地域に定着した人達の祭祀を行った跡で芦屋町内の海に面した遺跡では最北端に位置する。昭和四十九年（一九七四）観光道路延長工事中発見されたもので、古墳時代の土器や動物型（土をこねて作ったもので犬のようである）などが出土した。場所的に見ても古墳時代の祭祀跡と推定される。※これ等は芦屋町立歴史民俗資料館に陳列されている。

67

土器・面・窯跡 — 山鹿字土器面

土器を焼いた窯は、平地を少し掘りくぼめた平窯で土器が焼成されたといわれている。土器は弥生式土器から変化したもので、平安時代に至るまで長く使用された赤褐色の素焼土器をいう。山鹿地区には土器窯跡・浜口窯跡・田屋窯跡が知られている。（芦屋町誌）

68

不動堂 — 山鹿字田屋

奥ノ院 本尊 不動明王

69

徳満神社（牛鹿の守護神） — 山鹿字田屋

①鳥居（徳満宮） — 明治二十五稔（一八九二）御月田屋中

②幟立石柱 — 明治二十七年（一八九四）三月

力田社 鶴原 忠三 佐野 弥太郎

重岡 磯平 重岡 徳助

重岡 勝助 重岡 伴七 重岡 信吉

重岡 居吉 重岡 善太郎 加藤 米太郎

重岡 幸太郎 重岡 幸右エ門

田屋中 重岡 森右エ門 重岡 為次郎

重岡 倉次郎 重岡 左之吉 重岡 勝三郎

重岡 仙太郎 重岡 猪之吉 鶴原 休市

③水盤

④社殿

⑤猿田彦大神 — 田屋中